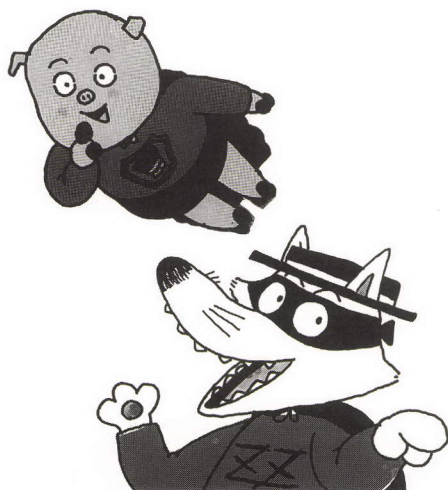
ポプラ社の小さな童話 ㊹
《ほうれんそうマンシリーズ》

はんばーぐ
ひるごはん
ふりかけ
おなかがへる
ほうれんそう
まんじゅう
みかん
むしぱん
めろん
もも
やきそば
いか
ゆどうふ
えだまめ
ようかん

さらだ
しゅーくりーむ
すぱげってい
せんべい
そば
たまご
ちょこれーと
つきみだんご
てんどん
とまと
なし
にんじん
ぬがー
ねぎ
のりまき

- ●へんし〜んほうれんそうマン
- ●ほうれんそうマンよいこの１年生
- ●ほうれんそうマンのおばけやしき
- ●ほうれんそうマンのじどうしゃレース
- ●ほうれんそうマンのようかいじま
- ●ほうれんそうマンのようかいがっこう
- ●ほうれんそうマンのゆうれいじょう
- ●かいけつゾロリのドラゴンたいじ
- ●かいけつゾロリのきょうふのやかた
- ●かいけつゾロリのまほうつかいのでし
- ●かいけつゾロリの大かいぞく
- ●かいけつゾロリのゆうれいせん
- ●かいけつゾロリのチョコレートじょう
- ●かいけつゾロリの大きょうりゅう
- ●かいけつゾロリのきょうふのゆうえんち
- ●かいけつゾロリのママだ〜いすき
- ●かいけつゾロリの大かいじゅう
- ●かいけつゾロリのなぞのうちゅうじん
- ●かいけつゾロリのきょうふのプレゼント
- ●かいけつゾロリのなぞなぞ大さくせん
- ●かいけつゾロリのきょうふのサッカー
- ●かいけつゾロリつかまる!!
- ●かいけつゾロリとなぞのひこうき
- ●かいけつゾロリのおばけ大さくせん
- ●かいけつゾロリのにんじゃ大さくせん
- ●かいけつゾロリけっこんする!?
- ●かいけつゾロリ大けっとう！ゾロリじょう
- ●かいけつゾロリのきょうふのカーレース
- ●かいけつゾロリのきょうふの大ジャンプ
- ●かいけつゾロリの大金もち
- ●かいけつゾロリのテレビゲームききいっぱつ
- ●かいけつゾロリのきょうふの宝さがし
- ●かいけつゾロリちきゅうさいごの日

ポプラ社の小さな童話㊹

ほうれんそうマンよいこの1年生

一九八五年 三月 第1刷
二〇〇三年 八月 第29刷

作　家　みづしま志穂
画　家　原　ゆたか
発行者　坂井宏先
発行所　株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町五　〒一六〇-八五六五
TEL　〇三―三三五七―二二一六（編集）
〇三―三三五七―二二一三（営業）
〇三―三三五七―二二一一（受注センター）
FAX　〇三―三三五九―二三五九（ご注文）
振替　〇〇一四〇―三―一四九二七一
印　刷　瞬報社写真印刷株式会社
製　本　株式会社難波製本

913	みづしま志穂
	ほうれんそうマンよいこの1年生
	ポプラ社　2003
	86p　22cm
	ポプラ社の小さな童話㊹

ISBN 4－591－01811－3

●作家紹介

みづしま志穂（みづしましほ）

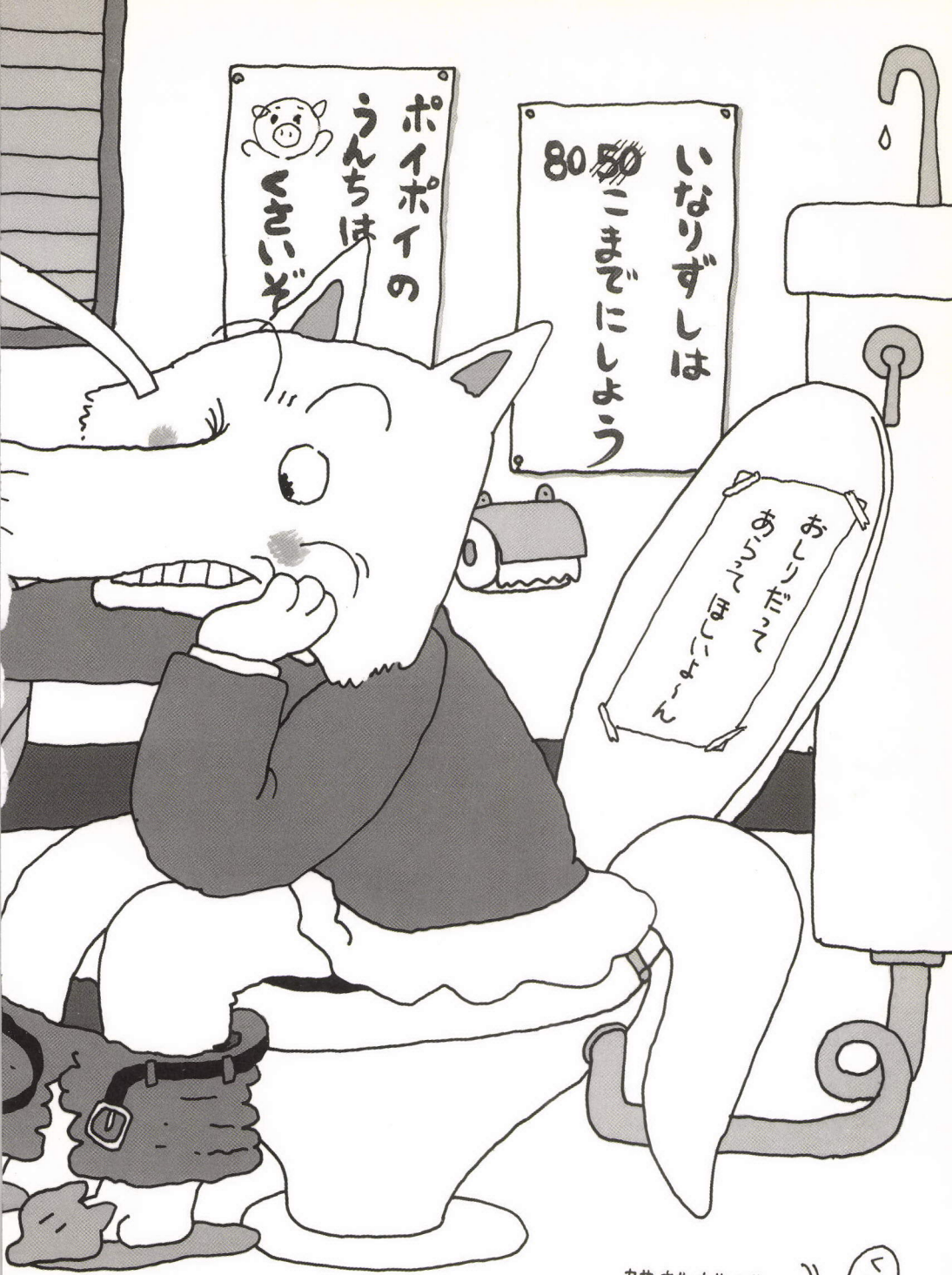
一九五二年、鹿児島県に生まれる。九州女子大学卒業。「つよいぞポイポイきみはヒーロー」で第七回毎日童話新人賞「好きだった風　風だったきみ」で第三十二回毎日児童小説賞を受賞する。今後の活躍が期待される。

●画家紹介

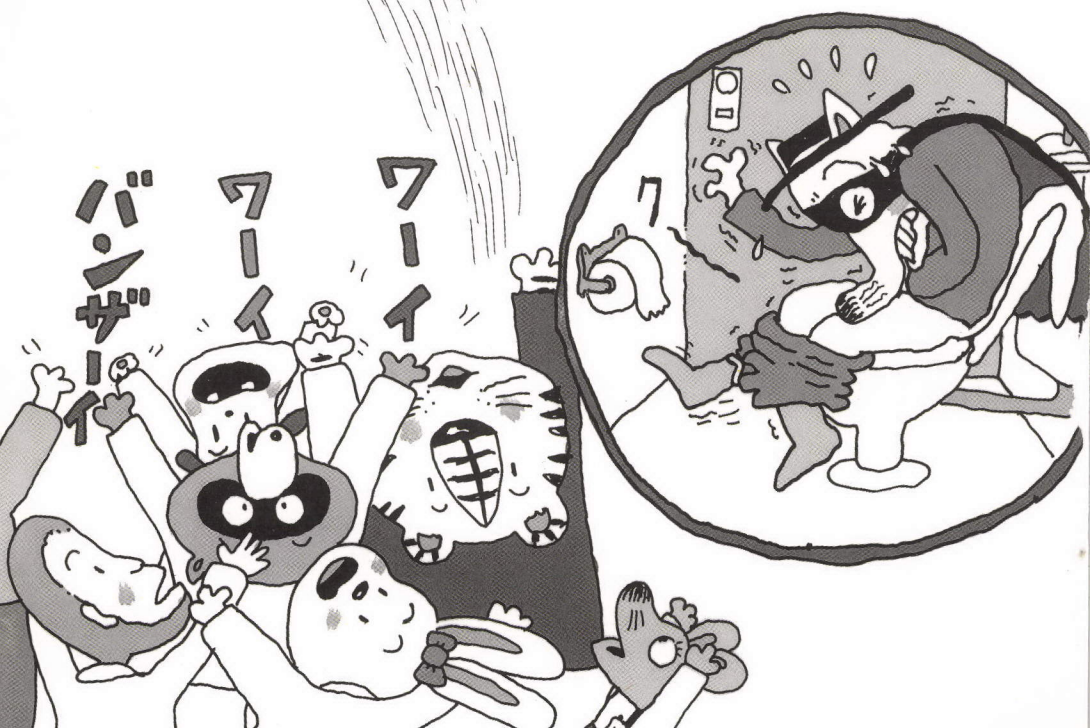
原ゆたか（はらゆたか）

一九五三年、熊本県に生まれる。七四年KFSコンテスト・講談社児童図書部門賞受賞。主な作品に、「ちいさなもり」「マータンはまさおくん」「てぶくろロケットの宇宙探険」「たからのげた」「ぷうのおつかい」「ぼくのもパパみたいになるのかな」などがある。

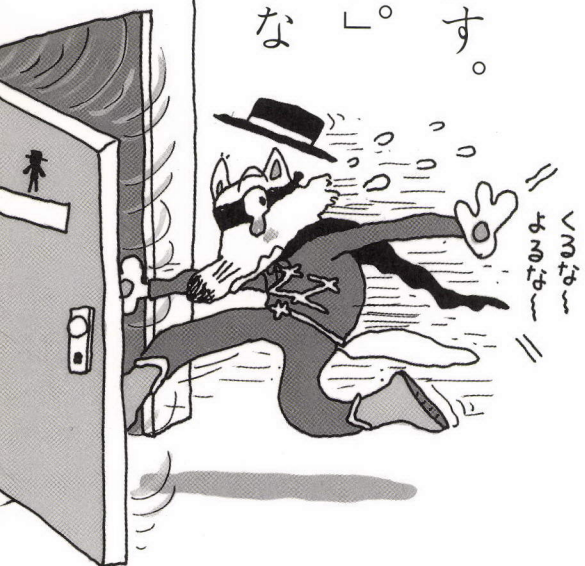
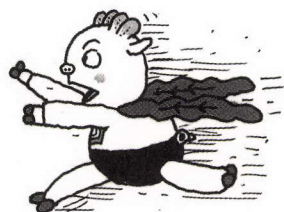
ヒッヒッヒ
つぎの　さくせんは、
これで　きまりだぜ。
イタタタタ……
はやく、おなか
なおさなくっちゃ。
へんそう ひゃっか
ママの おもいでアルバム
えらい キツネのはなし
こぶたのいじめかた2
ことしのもくひょう。
ねるまえに
おしっこをして
おねしょを
しないようにする
ケロちゃんの おなかいた ぐすり
イタミトレール
いちょうやく
ピーピー ナオール
ボケの花の かおり

ポイポイのうんちはくさいぞ
いなりずしは80 50こまでにしよう
おしりだってあらってほしいよ〜ん
カサ カサ カサ カサ
くさ〜い

どくしゃの
みなさんへ
さゆり先生からの
おねがい
わたしが
おいものすきなこと
だれにも
いわないでね

「ほうれんそうマン、ありがとう。でも　わたしが
ゆうかいされた　わけは、きかないで。」
ほうれんそうマンに　たすけだされた　さゆり先生(せんせい)は、
ぽっと　ほおを　そめて、いいました。
ほうれんそうマンは、にっこりと　ほほえんで、
さゆり先生(せんせい)を　だきあげると、
フワーリ
きょうしつ　めざして、ふうせんのように　とんで
いきました。それが　左(ひだり)の　きねんしゃしんです。

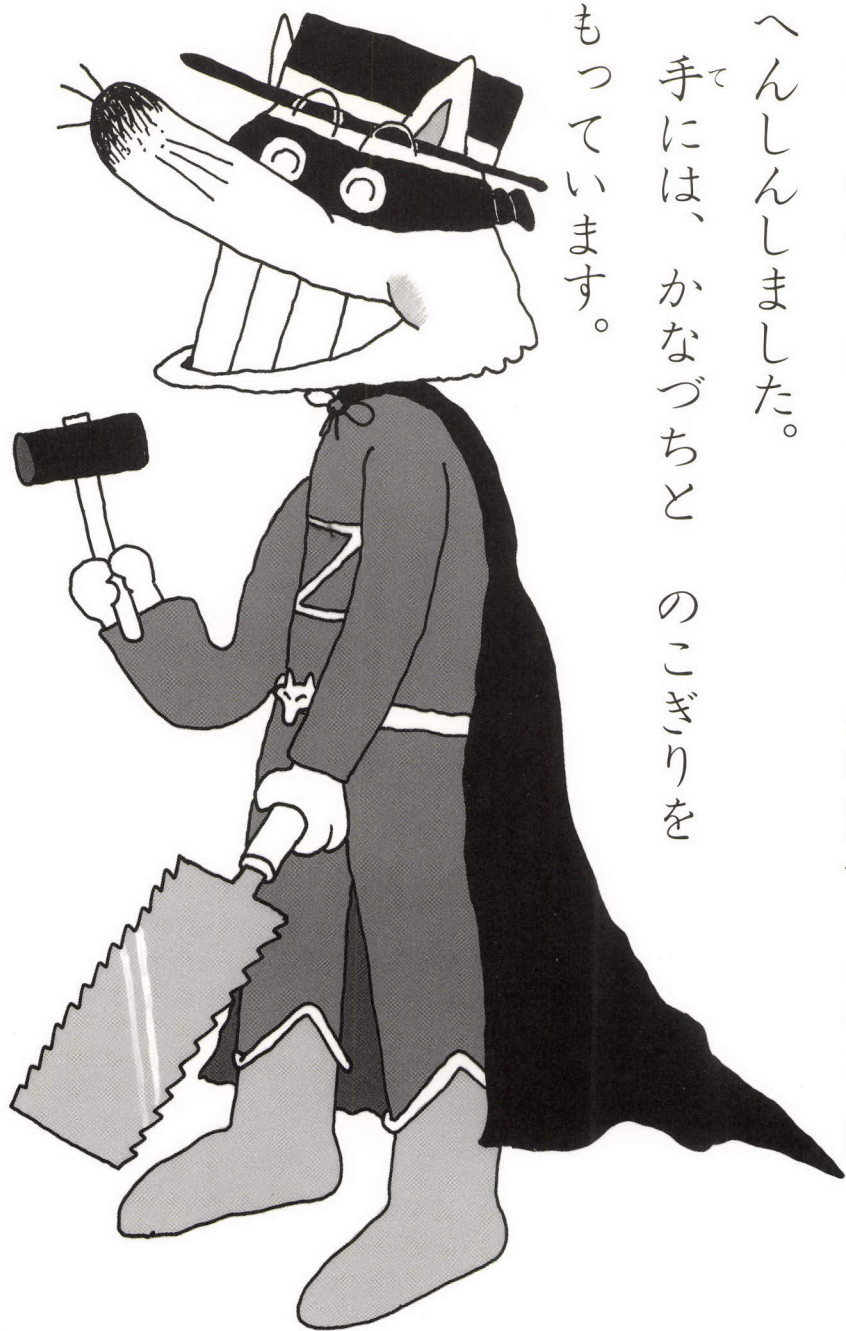
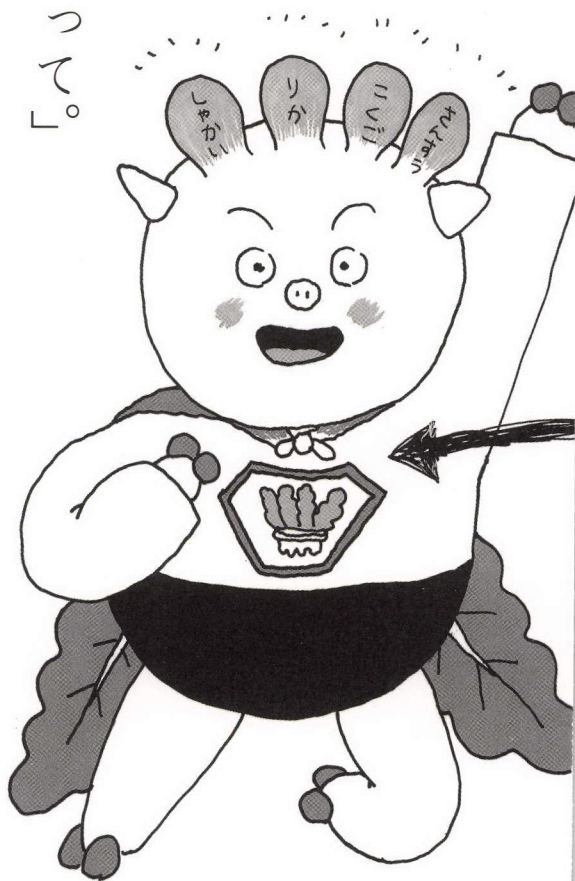
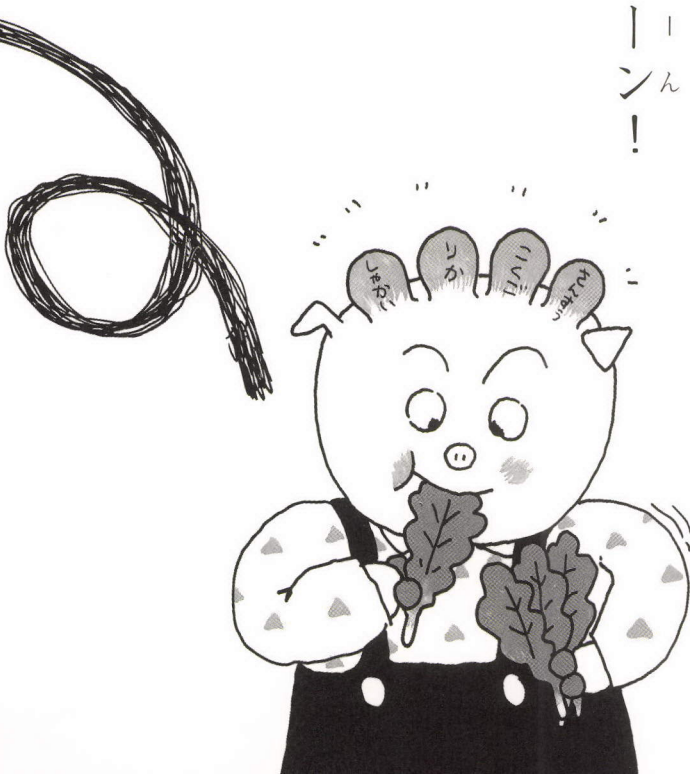
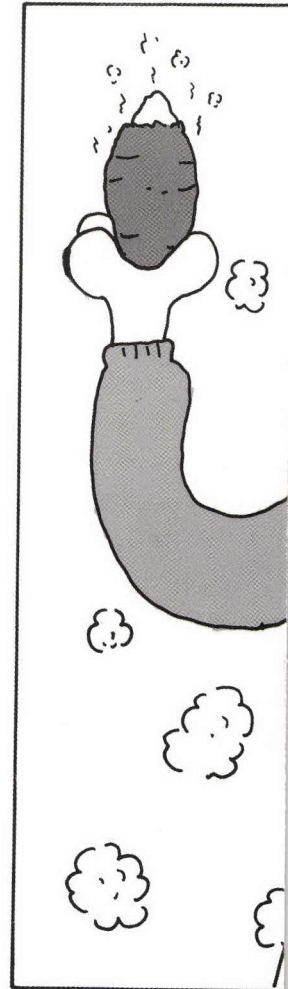
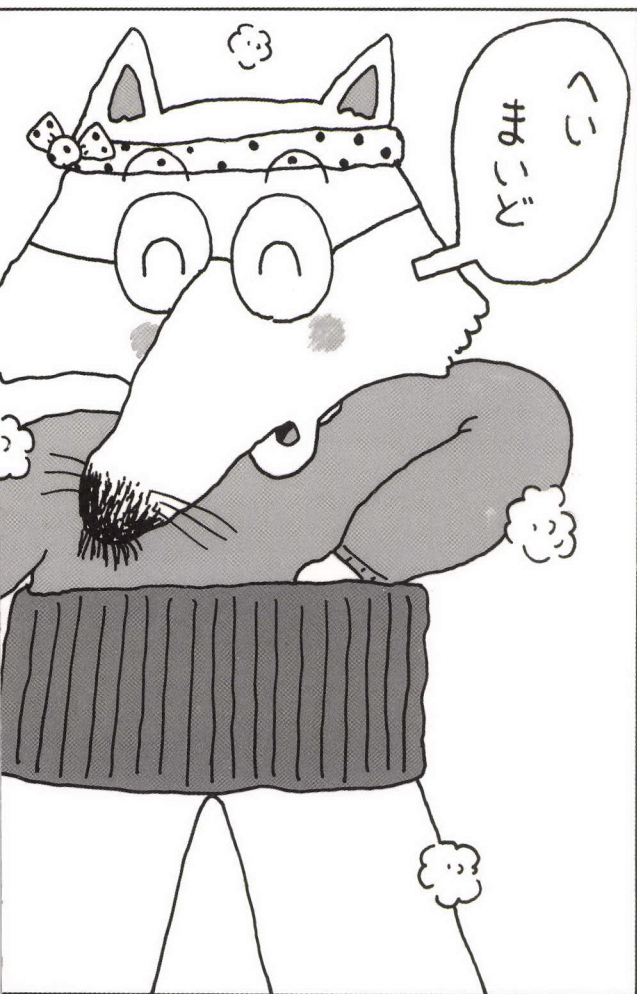
かいけつ　ゾロリは、
いなりずしの　たべすぎで、
おなかを　こわして
しまったのでした。

バタン!!
と、トイレに　かけこんでしまいました。

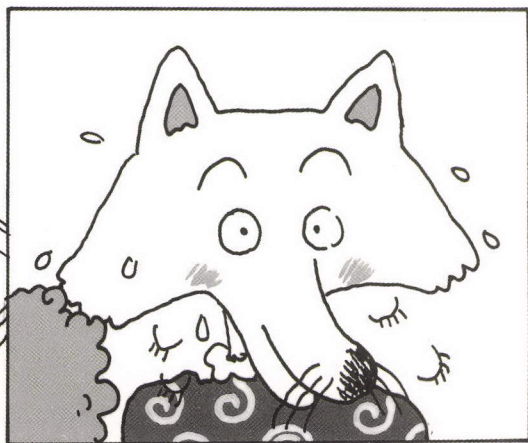
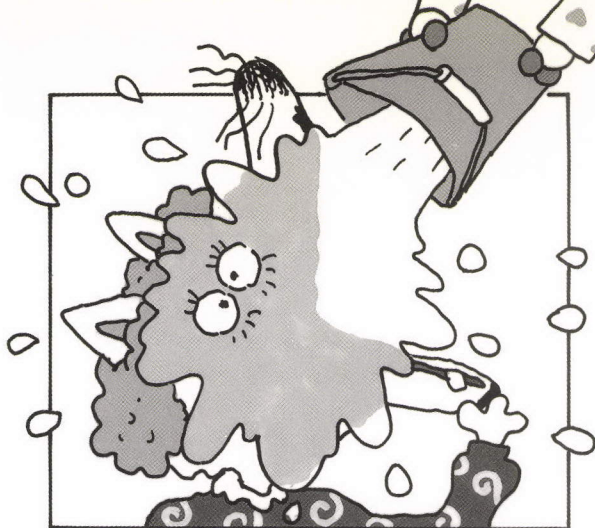
かいけつ　ゾロリの　おなかから、
へんな　おとが　したと　おもうと、
「あっ、いたいっ、ちょっと　タイムだ。」
かいけつ　ゾロリは、きゅうに　にげだしました。
「まてーっ。ひきょうだぞー。」
ほうれんそうマンは　おいかけます。
「しっ、しっ、ついてくるなってば。」
と、かいけつ　ゾロリは、なきそうな
こえで　いうと……

ギュルルルルー
ギョロロロロロー
グルルルルー
ユーカロカロ
キニキニ
カロロ
さん
こくご
りか
しゃかい

おいつめられて
しまいました。
かいけつ　ゾロリの
のこぎりが、ギラリと
ひかりました。
と、そのときです。

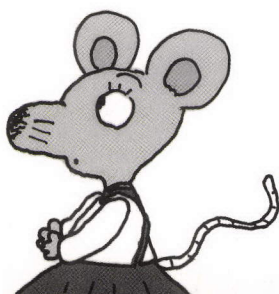
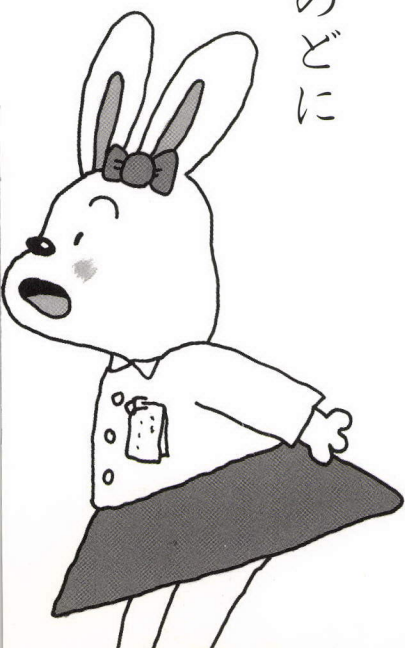
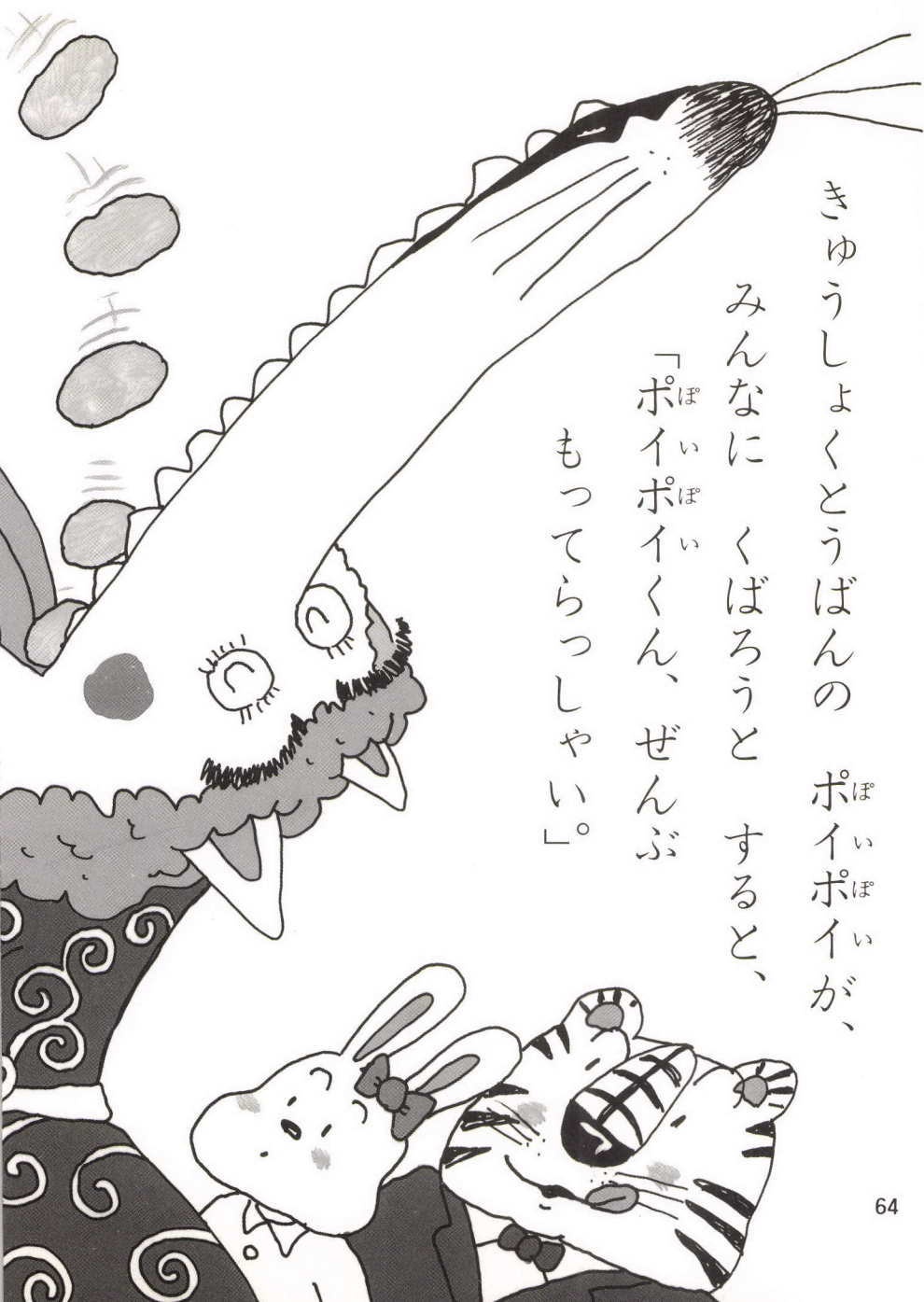
「なにをっ、たとえ　パワーが　おちていても、
せいぎは、かならず　かつことに　なっているのだ。」
「ふるい、ふるい。きょうこそ、おれさまの
さくせんがちだっ。」
かいけつ　ゾロリは、じりじりと　せまってきます。
ほうれんそうマンも、いっしょうけんめい　たたかい
ましたが、なにしろ、うさぎとびや、ろうかふき、
マラソン、うでたてふせで、つかれきった　からだです。
だんだん、きょうしつの　すみに

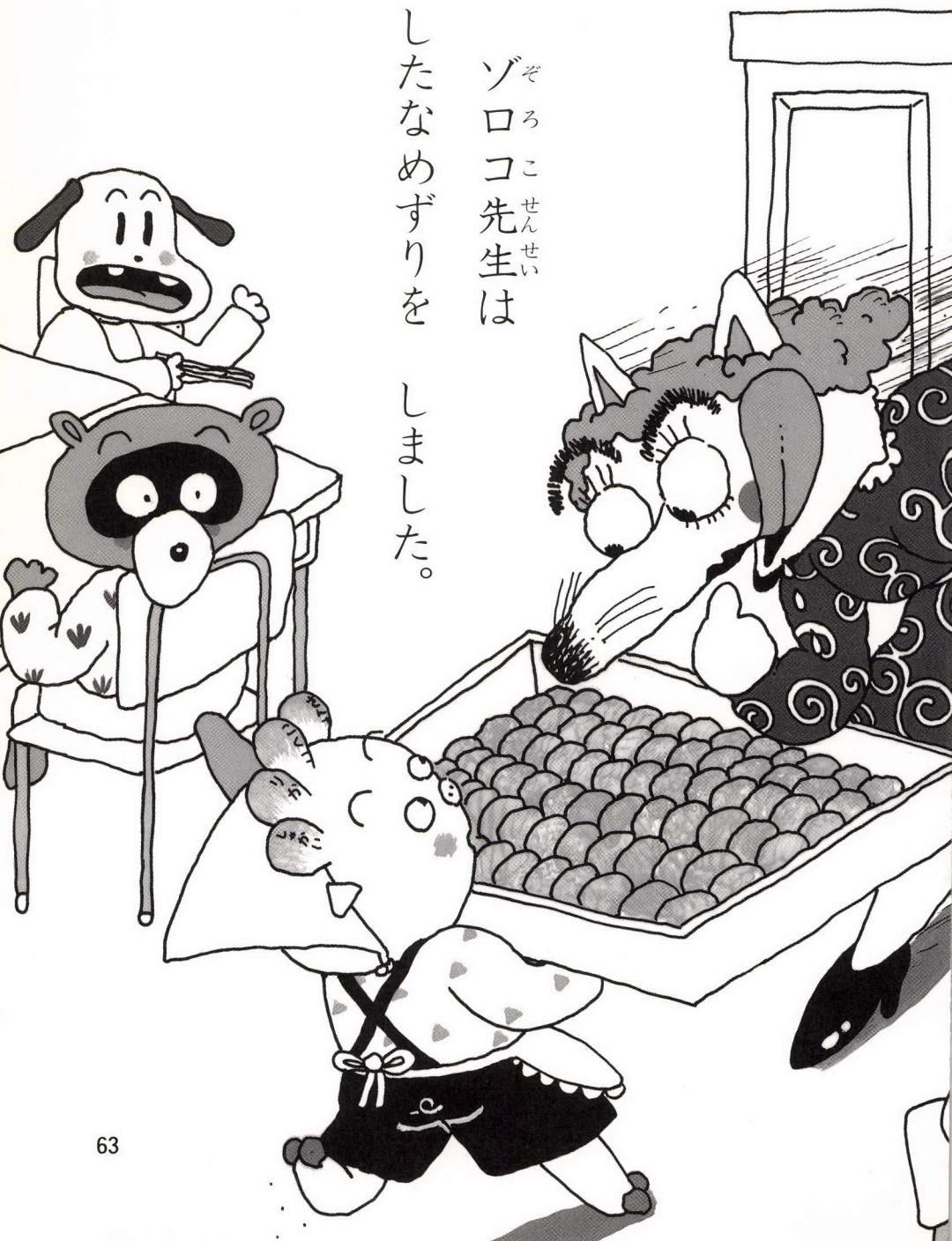
「かくごー、ほうれんそうマン。きさまも
これまでだ。その　わけは、四つの
たんこぶが、ものがたっている。」
ほうれんそうマンは、いたいところを
つかれてしまいました。
そうなのです。こくご、さんすう、
りか、しゃかいと、
たっぷりと　いじめられたので、
パワーが　おちていたのです。

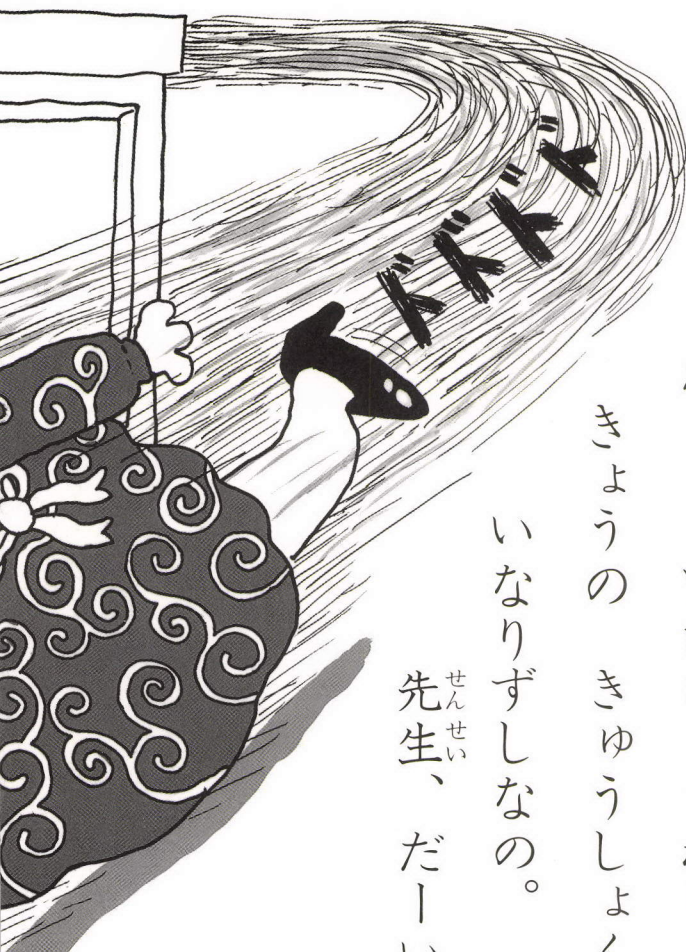
いもやの　おじさんから、　かいけつ　ゾロリに
へんしんしました。
手には、　かなづちと　のこぎりを
もっています。

「がんばって。」
クラスの　みんなが、おうえんします。
「ついに　でたな。ほうれんそうマン。
よーし、こっちも
ナムナム　ゾロリ　ナムナムゾロリ、トワッチ!!」

ポイポイが　ほうれんそうを　たべながら、つよく
おもいますと、
ジャ　ジャ　ジャ　ジャーン！
ピンクの　かお、
みどりの　マントの
ほうれんそうマンに
へんしんしていました。
「キャーッ、すてき。
ほうれんそうマン。」

「なんの　まねだ、　それは。」
「フフフ、　あるときは　いしやきいもやの　おじさん。
また　あるときは、　ゾロコ先生。　しかして　その
じったいは、かいけつ　ゾロリなのだ！　まいったか。」
「ウヌヌ、　おいもが　だいすきな　さゆり先生を、
いしやきいもやの　おじさんに　へんしんして、
ゆうかいしたのだな。ひきょうだぞ、ゆるせなーい。」

かいけつ　ゾロリは、しっぽを　ぶんぶん　ふりまわし、
「ナムナム　ゾロリ、ナムゾロリ、トワッチ！」
いもやの　おじさんに、へんしんしました。

「あっ、おまえは
かいけつ　ゾロリ！」
ポイポイは　さけびました。
「ウフッ、ばれてしまっては　しかたが　ないわね。
いかにも　おれさまは、かいけつ　ゾロリだ。」
「ウヌヌ、よくも　ぼくの　あたまを
たんこぶだらけに
してくれたな。
さゆり先生は、どうした！」

ポイポイが、 バケツに くんできた 水を、
ゾロコ先生の 大きく あいた 口に、バッシャン!!
すると ゾロコ先生の おけしょうが ながれて……

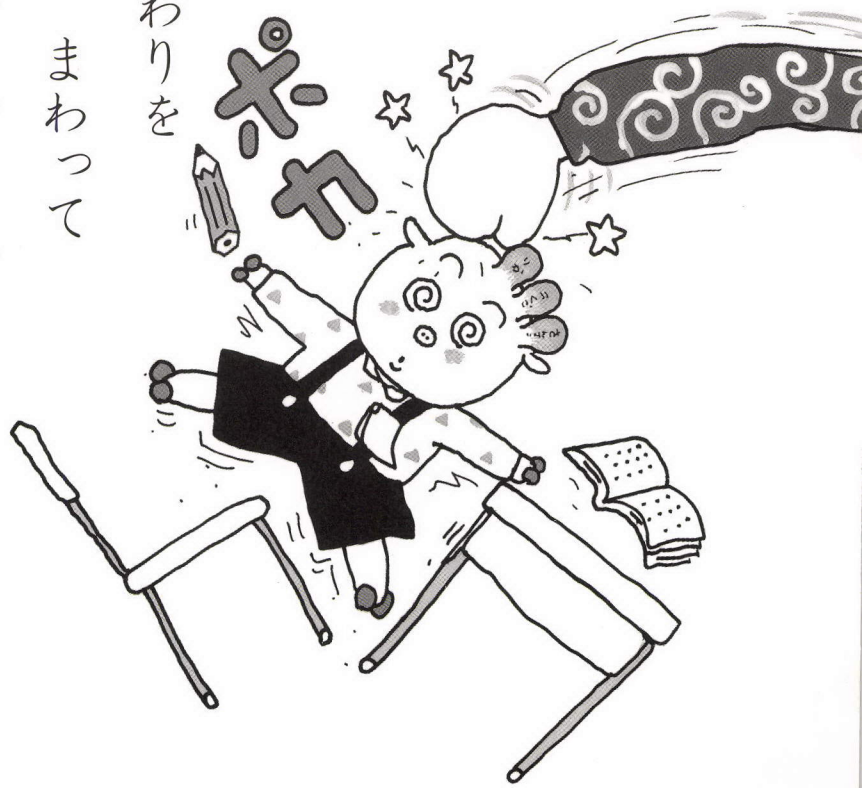
ククックック

よいこの　みんなは、　かぞえはじめました。
「……三十三、　三十四、　三十五……ぼくたちの
たべるぶん、　のこるかなあ。」
ゾロコ先生は、　まだまだ　がんばります。
「……九十九、　ひゃく、　ひゃく一……う、　うーん。
み、　みず、　みず～」。
ゾロコ先生は　たべすぎて、　のどに
つめてしまったようです。

ゾロコ先生は、いなりずしを
おてだまのように、口のなかに
なげこみはじめました。
「さ、かぞえて、かずの
おべんきょうよ。」

きゅうしょくとうばんの　ポイポイが、
みんなに　くばろうと　すると、
「ポイポイくん、ぜんぶ
もってらっしゃい。」

ゾロコ先生は
したなめずりを　しました。

きゅうしょくの じかん

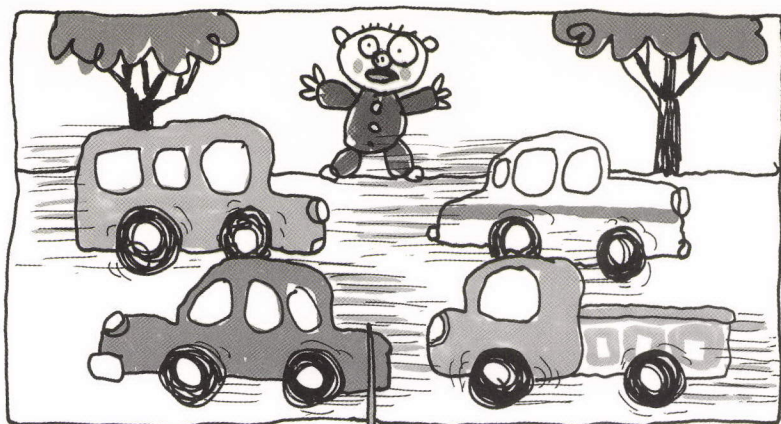
「えーっ、ゾロコ うれしーい。
きょうの きゅうしょくは、
いなりずしなの。
先生、だーいすき。」

うさぎとびを　しながら、
ポイポイは　くびを
ひねりました。
（ぜったい
おかしいんだよね。）

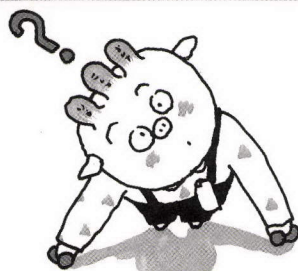
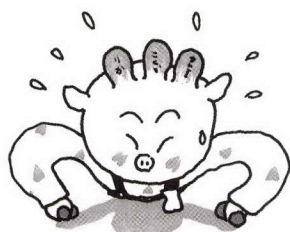
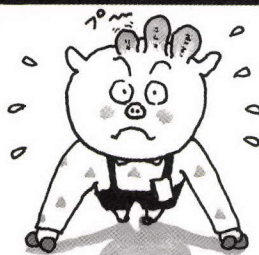
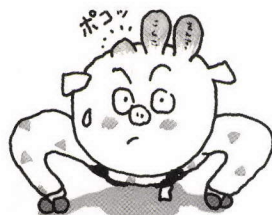
イエーイ
さんすう
こくご
りか
しゃかい

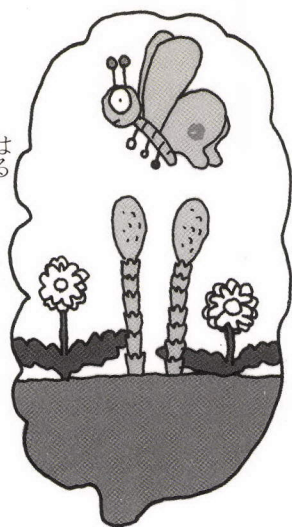
もいちど
ようちえんに
かえったほうが
いいんじゃ
ないの。
うさぎとびで
こうしゃの　まわりを
ひゃっかい　まわって
らっしゃーい。」

ゾロコ先生は、もう　大はしゃぎ。
「ばかめ。子どもは　ほどうきょうを
わたったのだ。」
というと、ポイポイの　あたまを
ポカリと　たたいて、
いいました。
「ポイポイくん、
こんな　もんだいも
できないようじゃ、

ポイポイは
こたえました。
「あぶないなあ、
じこに　あいます。」

四じかんめ

しゃかい

「くるまが　ビュンビュン
はしっている　大どおりを
しんごうを　みないで、
おうだんほどうでも　ない
ところを　わたった　子どもは、
どうなるでしょうか。」

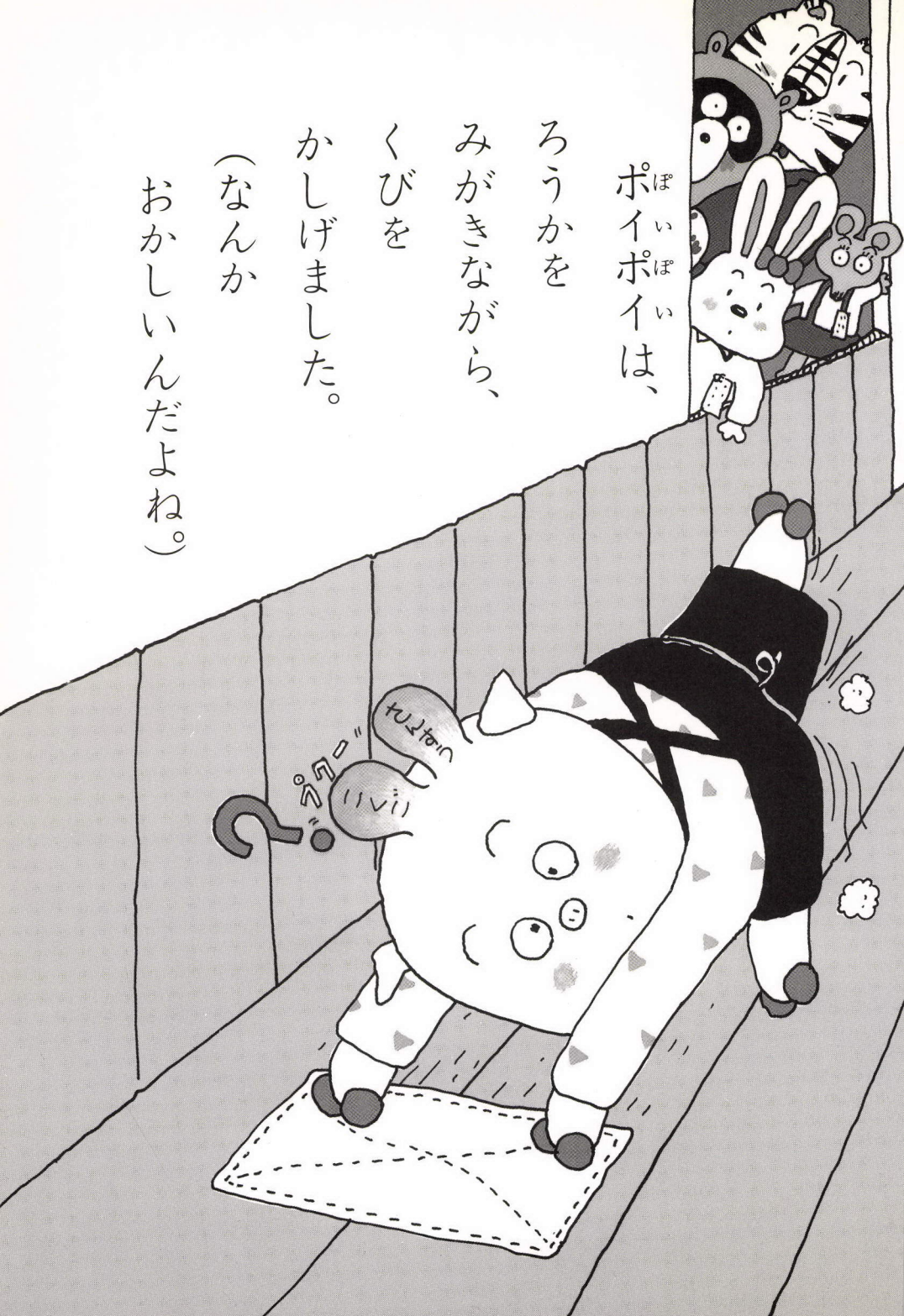
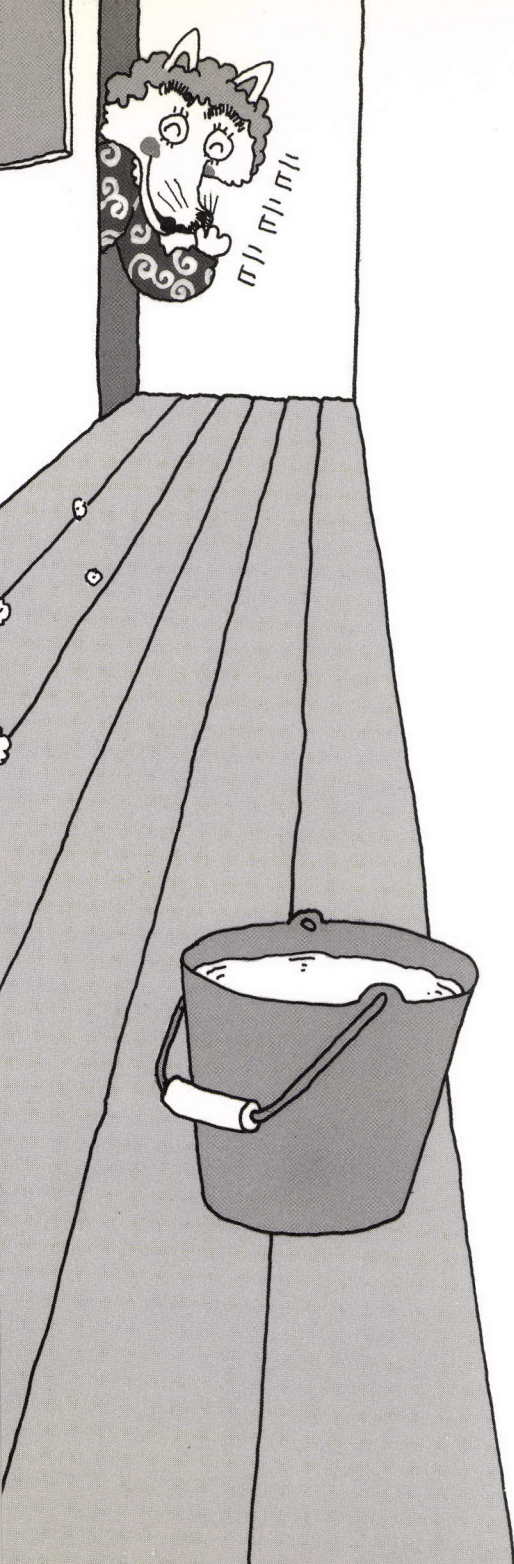
ポイポイは、うでたてふせを　しながら、
くびを　かしげました。
（ますます　おかしいんだよね。）

「りかの　じかんには、『ゆきが　とけると、水に
なる。』が、ただしい　こたえに　なるのだ。」
ゾロコ先生は、ポカリと　ポイポイの　あたまを
たたくと、ごきげんで　いいました。
「ポイポイくん、うでたてふせを　ひゃっかい
やってらっしゃい。」

ポイポイは、ほっと　ひとあんしん。
だって、こくごの　じかんに、「ゆきが　とけると
春に　なりますね。」と、ゾロコ先生が
いったのを、おぼえて　おいたからです。

「春に　なります。」
ポイポイは　こたえました。

三じかんめ

りか

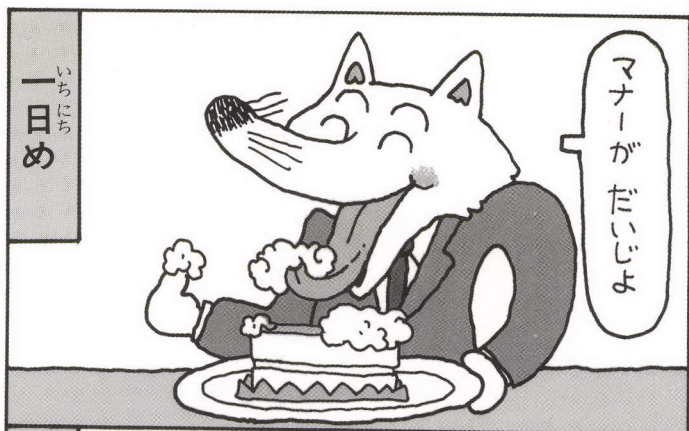
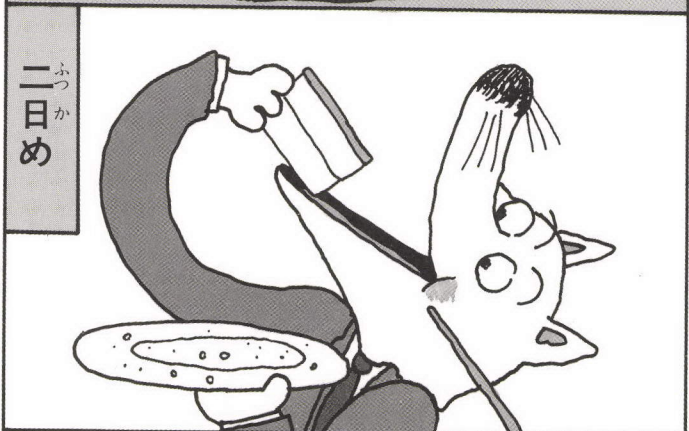
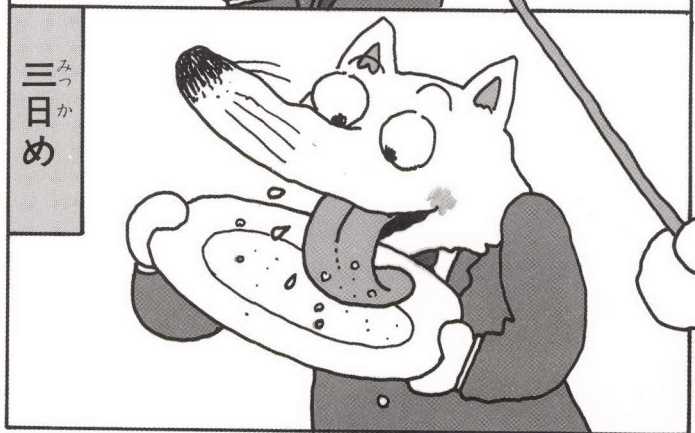
「ゆきが　とけると、なんに　なるでしょう。」
ゾロコ先生が　ききました。

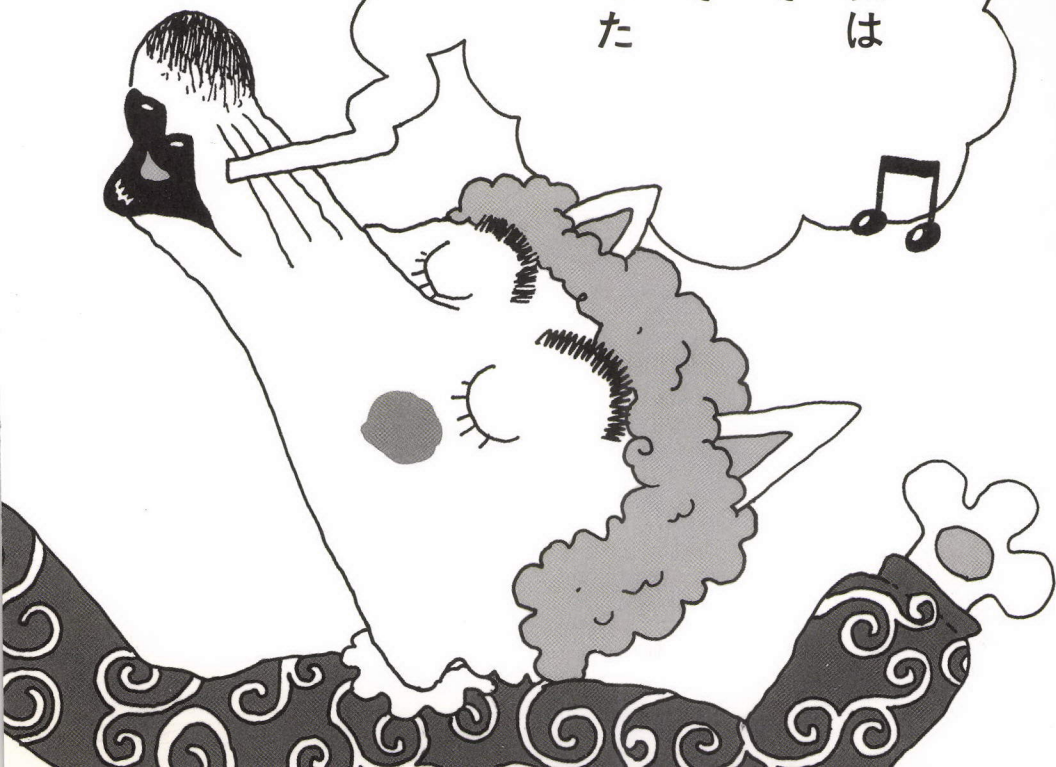
ポイポイ(ぽいぽい)は、
ろうかを
みがきながら、
くびを
かしげました。
(なんか
おかしいんだよね。)

ゾロコ先生は、 もう よだれを たらしそうに
にひにひ わらって、 いいました。
「ポイポイくん、 ろうかを ぞうきんで ぴっか
ぴかに なるまで、 みがいて らっしゃい。」

マナーが だいじよ

一日め

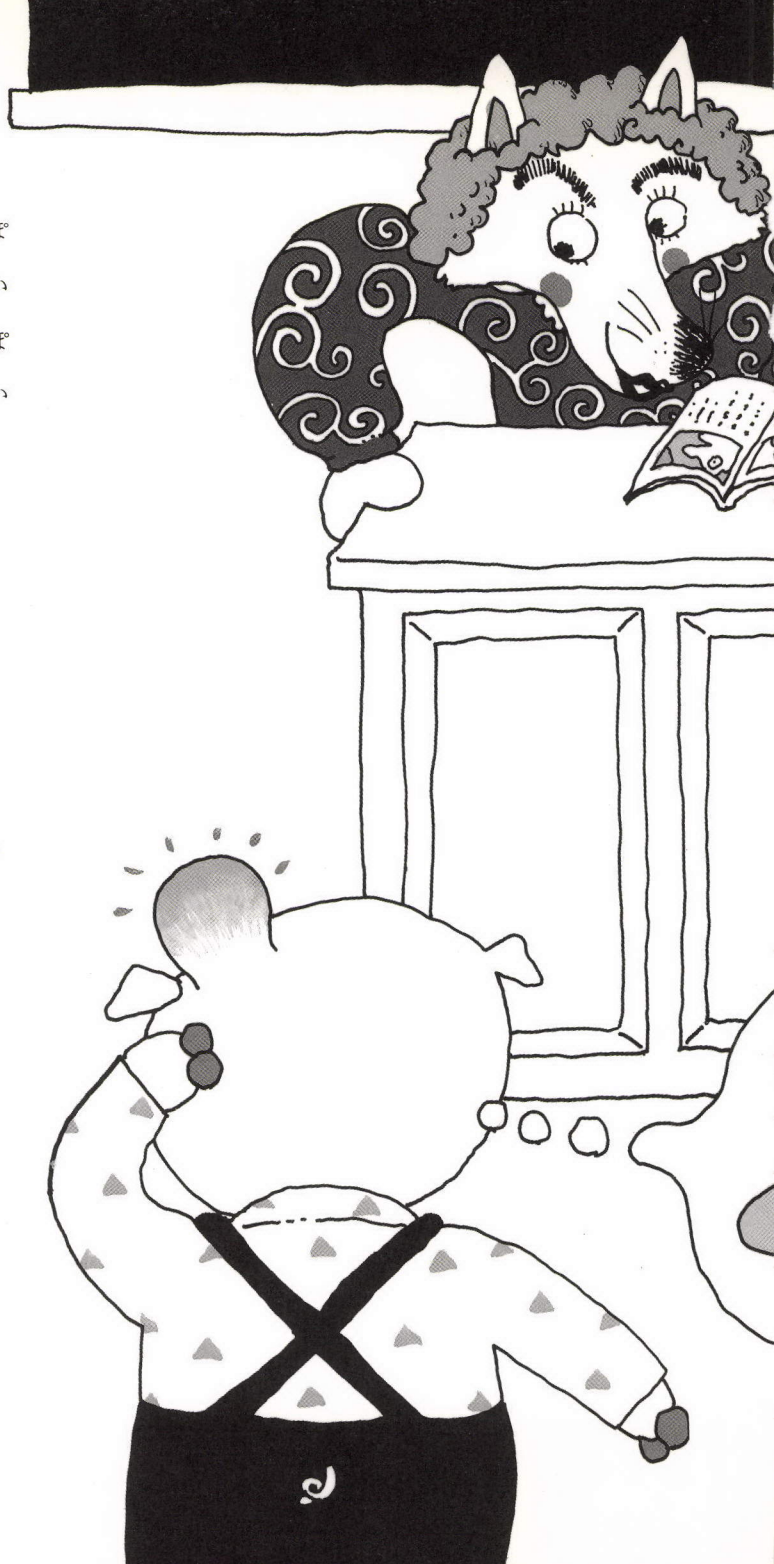
二日め

三日め

よいこの　一年生の　みんなは、あっけに
とられて、ゾロコ先生を　みています。

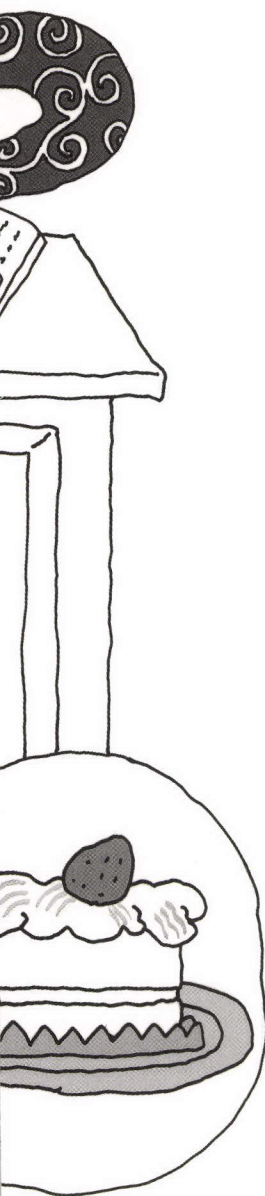
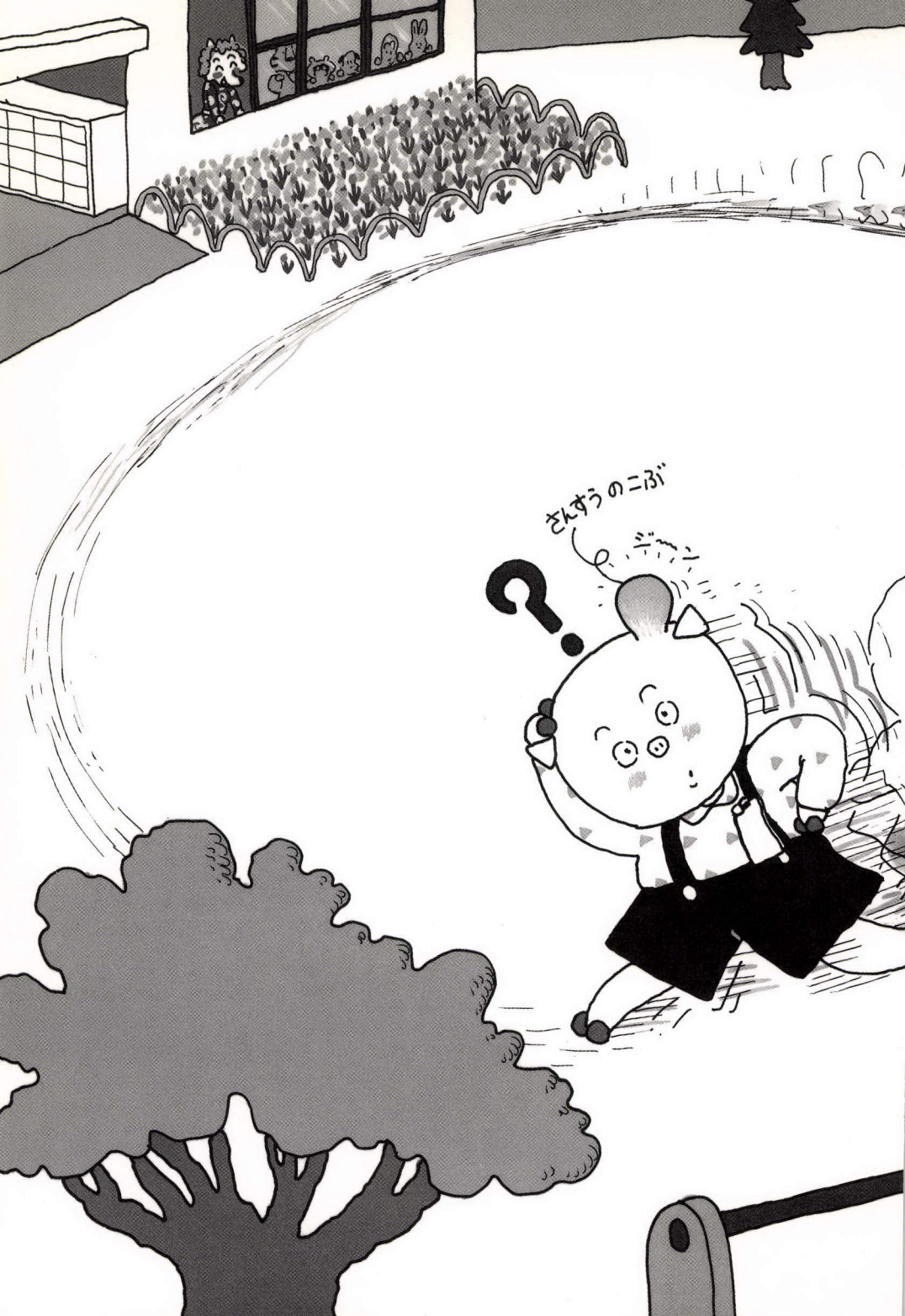
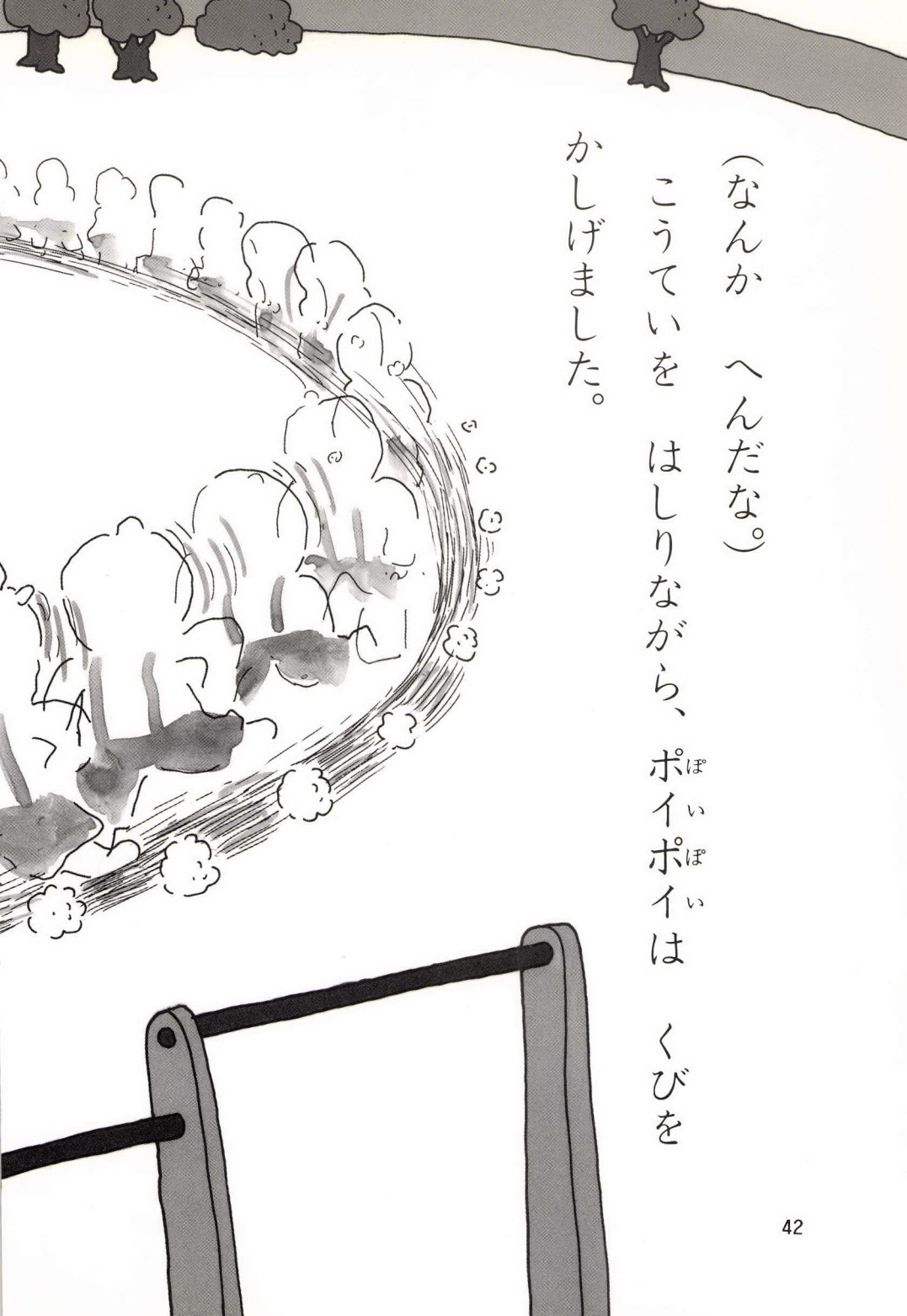
ショートケーキを　たべるには
一日めに　クリーム　なめて
二日めに　カステラ　たべて
三日めに　おさらに　のこった
くず　なめる
ルルリ　ラララン
これが　ただしい
たべかたよ　ラララ

ゾロコ先生は　ちょうしに
のって、うたまで　うたいはじめました。

その　こたえを　きくと、ゾロコ先生は、
「ママーッ、また　やったわ――。」
と　さけぶと、また　ポカリと、ポイポイの
あたまを　たたきました。
「ショートケーキは、なめると　カステラに
なるのだ。」
なんて　きたない　もんだいでしょう。

ポイポイは　こたえました。

「なくなります。」

二じかんめ　こくご

ゾロコ先生は、また ポイポイに しつもんしました。
「ゆきが とけると、春に なりますね。では、ショートケーキを なめると、どうなるでしょう。」
（これは おれさまが、ショートケーキを、だいじに だいじに たべていたとき、ぱっと ひらめいた もんだいなのだ。ウフフフ。）

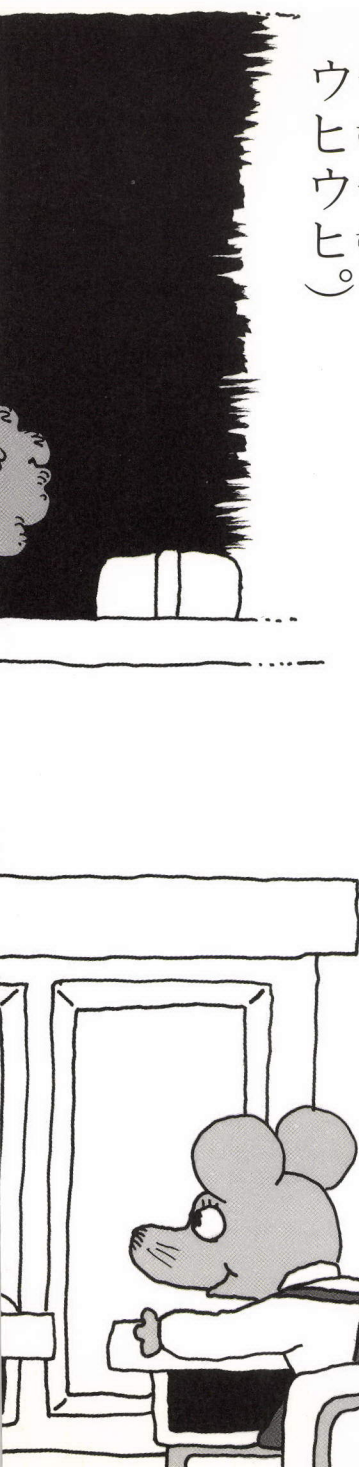
さんすうのこぶ
ジ〜ン
?

（なんか　へんだな。）
こうていを　はしりながら、ポイポイは　くびを
かしげました。

こんな　かんたんな　もんだいも　わからないなんて、ゾロコ先生、かなしいわ。ポイポイくん、こうていを　十しゅう　はしってらっしゃい。
ポカリ

その　こたえを　きくと、ゾロコ先生は、
「ママーッ、やったわー。」
と　さけぶと、ポカリと　ポイポイの　あたまを
たたいて、いいました。

ポイポイは
こたえました。
「3－2＝1
だから　一こ。」

一じかんめ　さんすう

「い、いくわよっ、ポイポイ。」
ゾロコ先生は、大きく　いきを　すいこみました。
「あめが　三こ　ありました。二こ　なめると、
なんこに　なるでしょう。」
（一こと　こたえろ、ポイポイッ。そうすれば……
ウヒウヒ。）

すっからかん。その　くろうも、このときのために、あったのだ。かくご、ポイポイ。)

（なんか　へんだな……でも、まあ　いいや。
じゅぎょうに　はいれば、こっちのもんさ。）
ゾロリは、こころのなかで　つぶやきました。
（もうすぐ、『ポイポイくん、こんな　もんだいも
わからないの。ボカッ！』なんて、やれるのだ。
くーっ、ゾロリ、うれしい……いしやきいもの
やたいづくりでは、ゆびを　かなづちで
ひっぱたいて、まだ　はれあがっているし、
おこづかいは　ホクホク　イモーヌを　かうので、

「あ……う。ひどい。先生のこと、にらんだ——。」
ゾロリが　なきまねを　すると、ポイポイが、
「シマオ、さゆり先生が　ゾロコ先生に　たのんだの
なら、ぼくたちは、ゾロコ先生の　いうことを
きかなきゃ　いけないよ。おみまいに　いくのは、
ほうかごでも　いいじゃ　ないか。」
と　いったので、ゾロリは　おもわず、
「ポイポイ、ありがとう。」
と、いってしまいました。

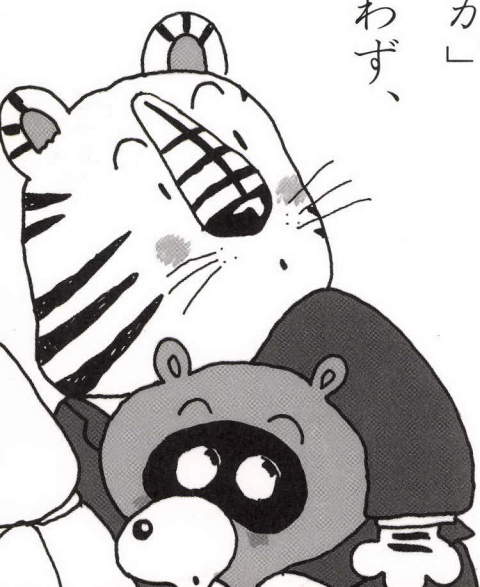
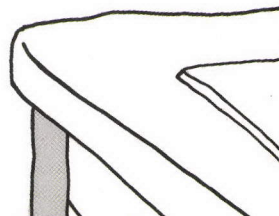
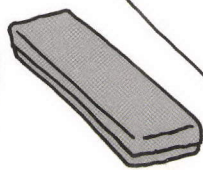
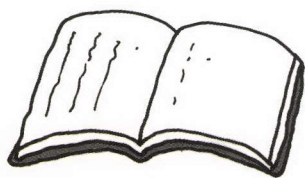
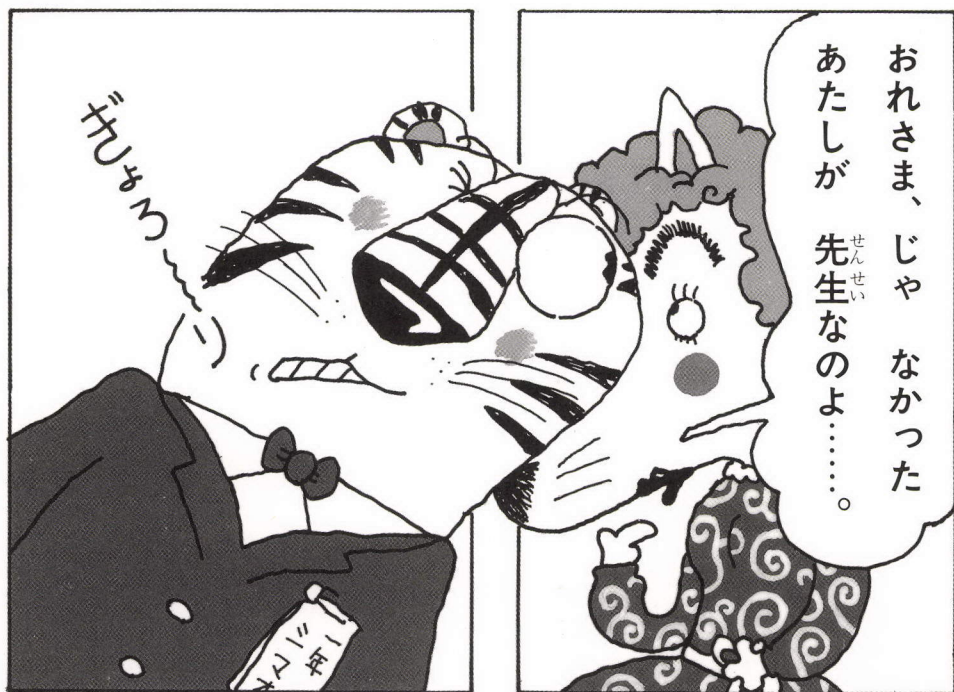
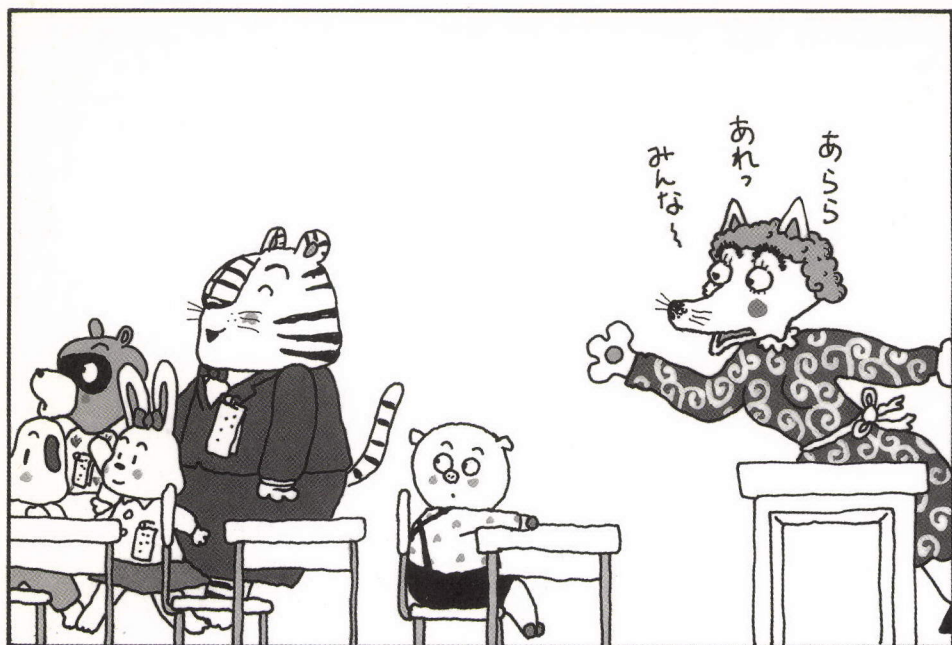
あらら

あれっ

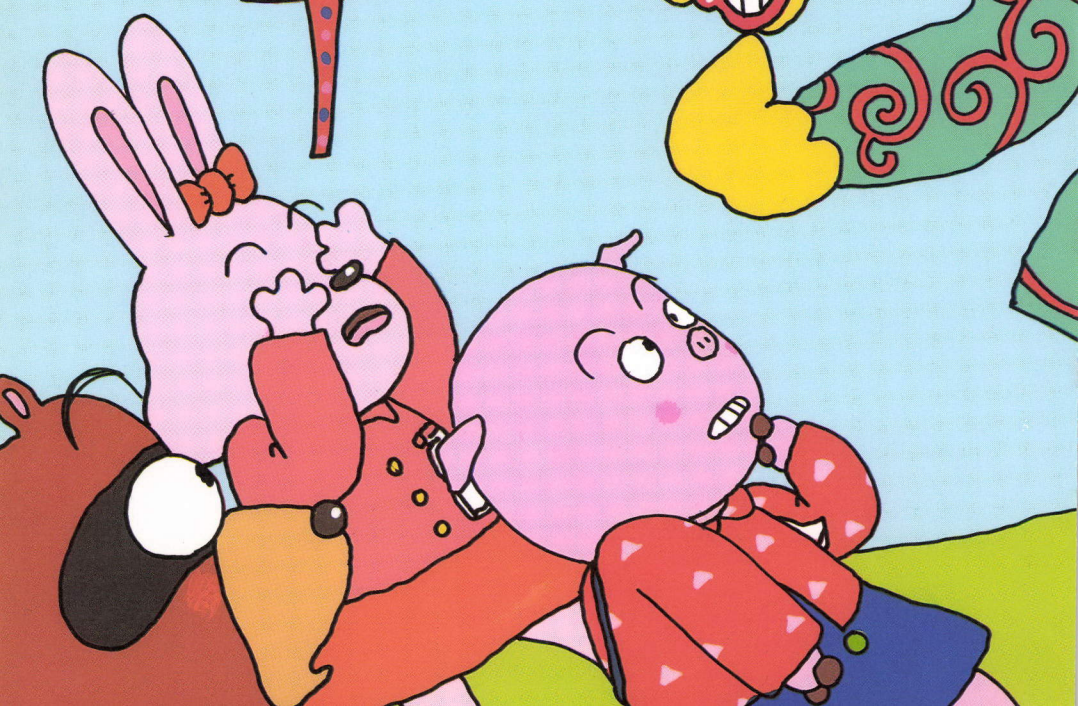
みんな〜

おれさま、じゃ なかった
あたしが 先生(せんせい)なのよ……。

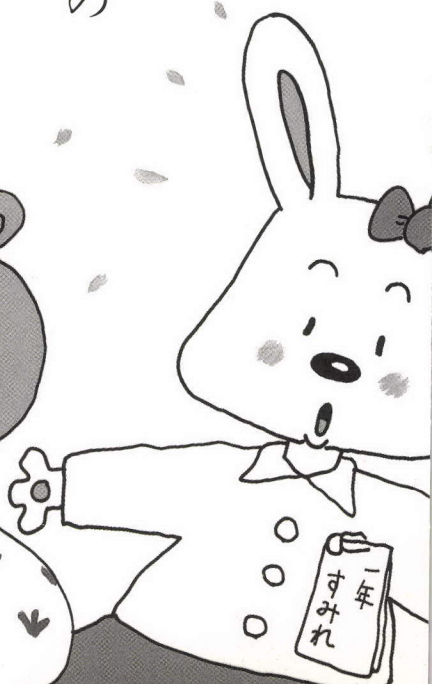
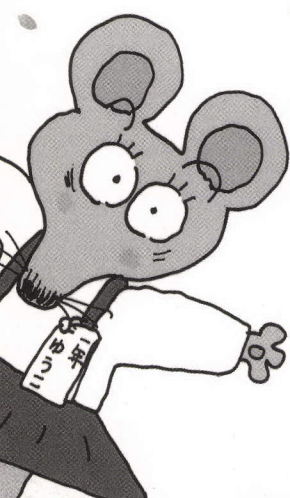
ぎょろ〜〜り

ゾロコ先生ってかっこわるいな。おれ、びじんの先生じゃなきゃ、やるきでないんだけどな。
一年 ポンチ
それより、みんなさゆり先生のおみまいにいかないか？
そうだよ、さゆり先生のおみまいにいこうぜ。
一年 シマオ
一年 イヌジ

そうだよー。
きもちわるーい！
ガクッ

みんなの　ひなんの　こえを　よそに、
「あたしを、ゾロコ先生って　よ・ん・で！」
ゾロコ先生に　ばけた　ゾロリは　うれしくて、
にひにひ　わらいながら、いいました。
（もうすぐ　ポイポイを、おもうぞんぶん　いじめる
ことが　できるのだ。ウヒウヒ。）
「ゾロコ先生、なぜ　ひとりで　わらってんの。
きもちわる〜い。」
うさぎの　すみれちゃんが、いいました。

え〜っ　うっそ〜

「しんゆうの　さゆりが　きゅうびょうに　なったのよ。
だから　さゆりが
なおるまで、あたしが
たっぷり、きみたちの
めんどうを
みてあげるわ。
ウフフッ。」

みんな、ぽかーんと　口を
あけているばかり。
さゆり先生が、バラの　花の
つぼみなら、この　先生は
あらしの　あとの　はらっぱの
ように、めちゃくちゃです。
げじげじまゆげに　はみだし口べに。
からくさもようの　ふろしきで
つくった　ようふく。

よく日……。

きょうしつに　先生が

はいってきました。

「よいこの　みなさーん、おはよう。」

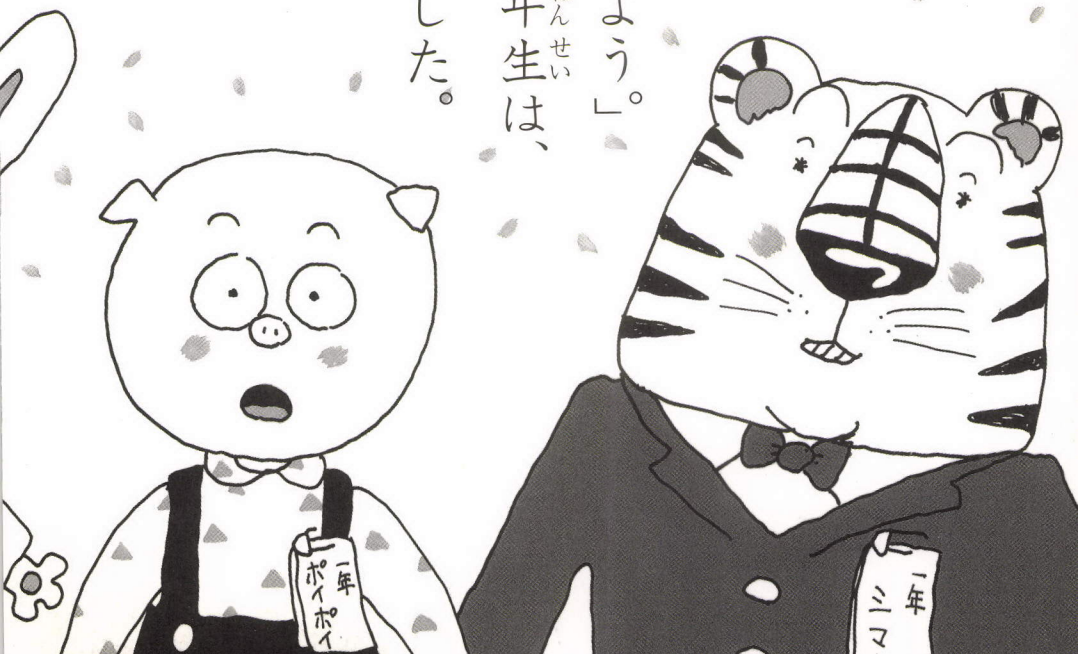
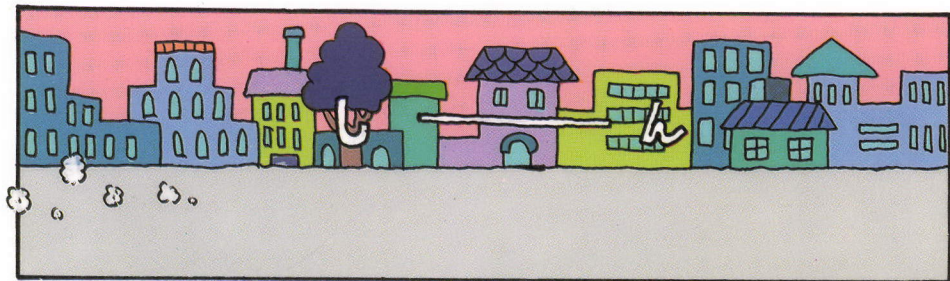
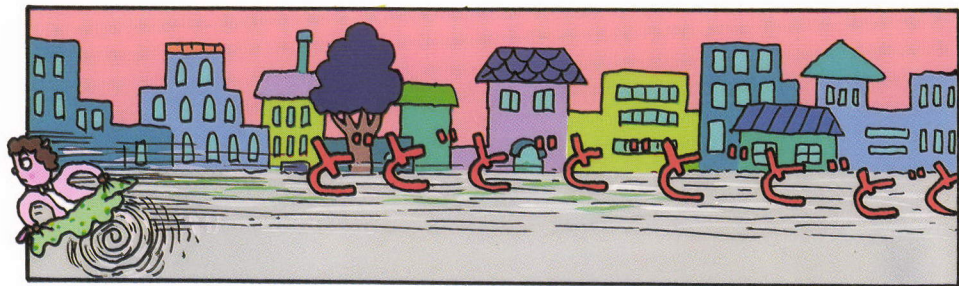
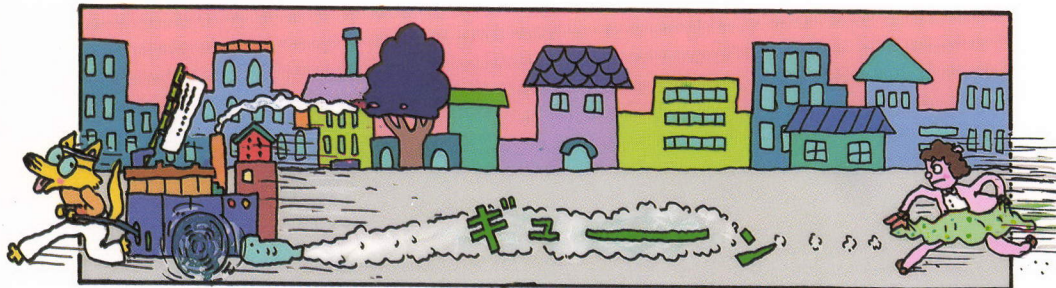
ポイポイたち、よいこの　一年生は、

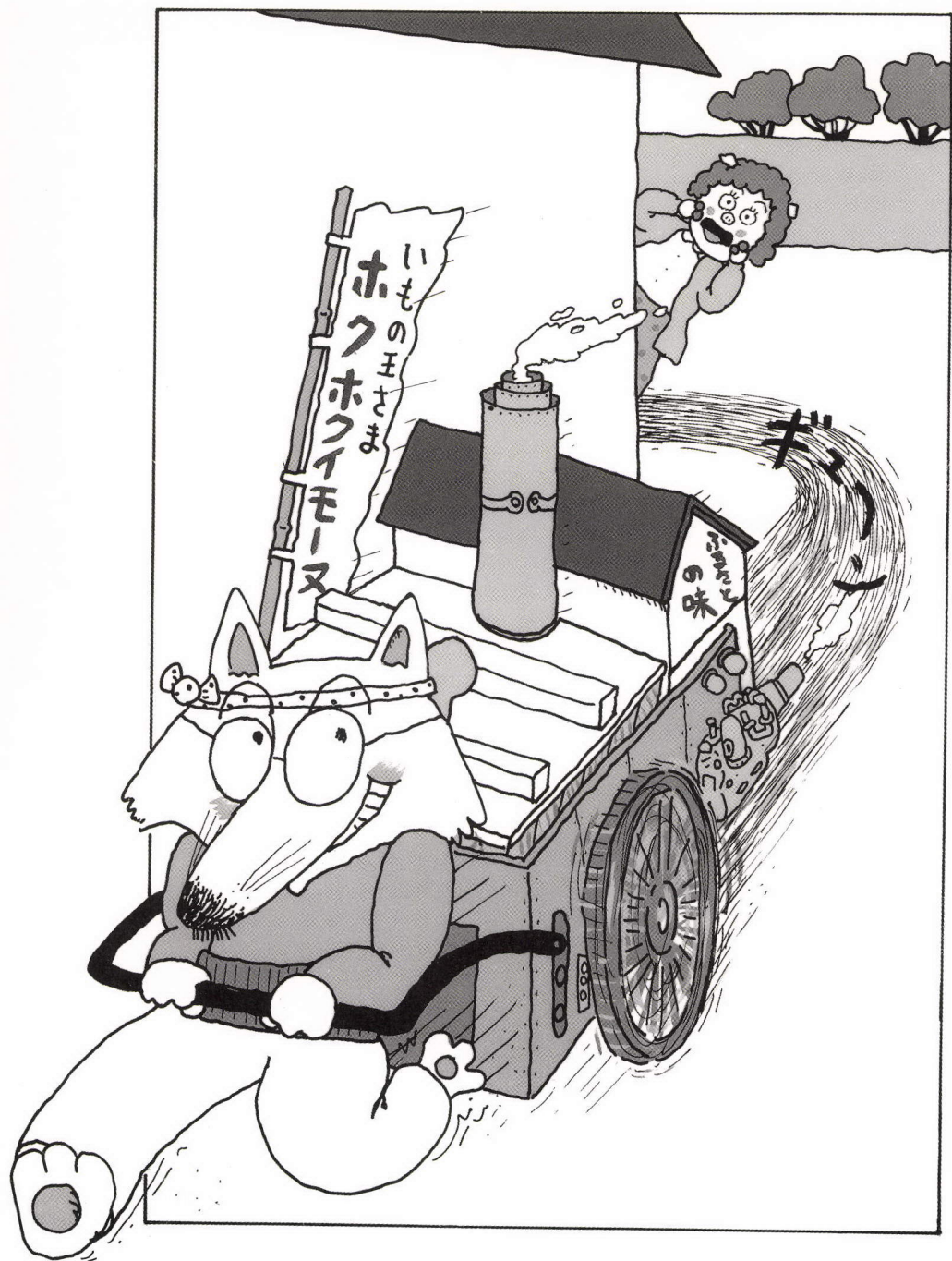
ぎょっと　して、とびあがりました。

「おや、よいこの　みなさん、

おへんじは？」

し～ん

ギューーーン
とととととととと
しーーん

「まあ　ひどい。でも　さゆり、ぜったいに
おいもを　かってみせるわ。」
さゆり先生(せんせい)は、ハイヒール(はいひーる)を　ぬぎました。そして
かた手(て)に　もつと、きあいを　いれて、はだしで
いもやを　おいかけはじめました。
いもやも　スピードアップ(すぴーどあっぷ)して、
にげていきます。
そして　それっきり、さゆり先生(せんせい)の　すがたは
きえてしまったのでした。

いもの王さま
ホクホクイモーヌ
ふるさとの味
ギューン

「……ええい、もう　がまんできない　ことよ。」
さゆり先生は、
「おいもやさん、まって。」
と、かどを　まがろうと　した　いしやきいもやに、
よびかけました。
でも、やきいもやは　とまって　くれません。
「おいもやさんたら、ひとつ　くださいな。」
なのに、やきいもやは　とまるどころか、
スピードを　だして、はしって　いきます。

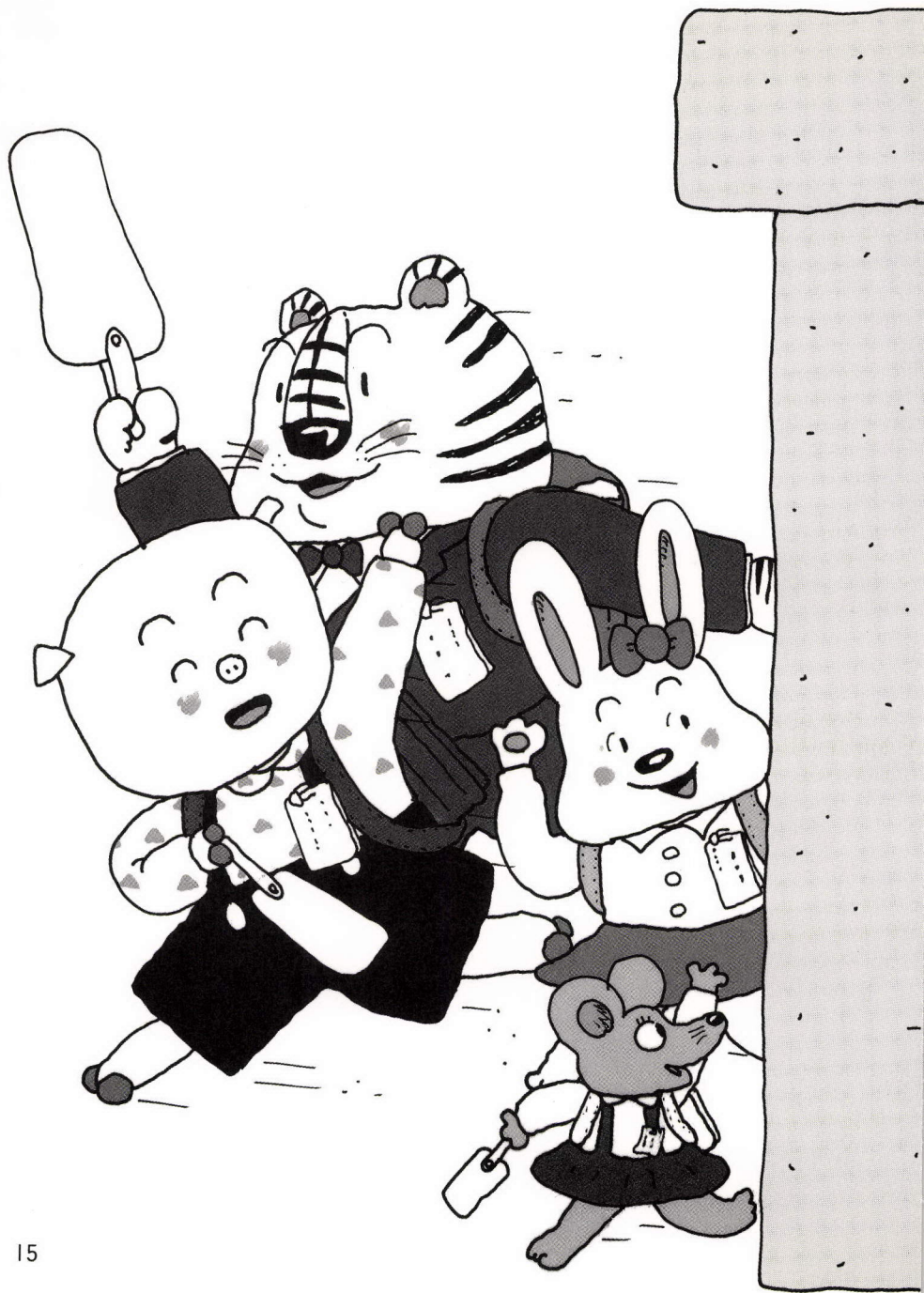
つよく
なるばかり。

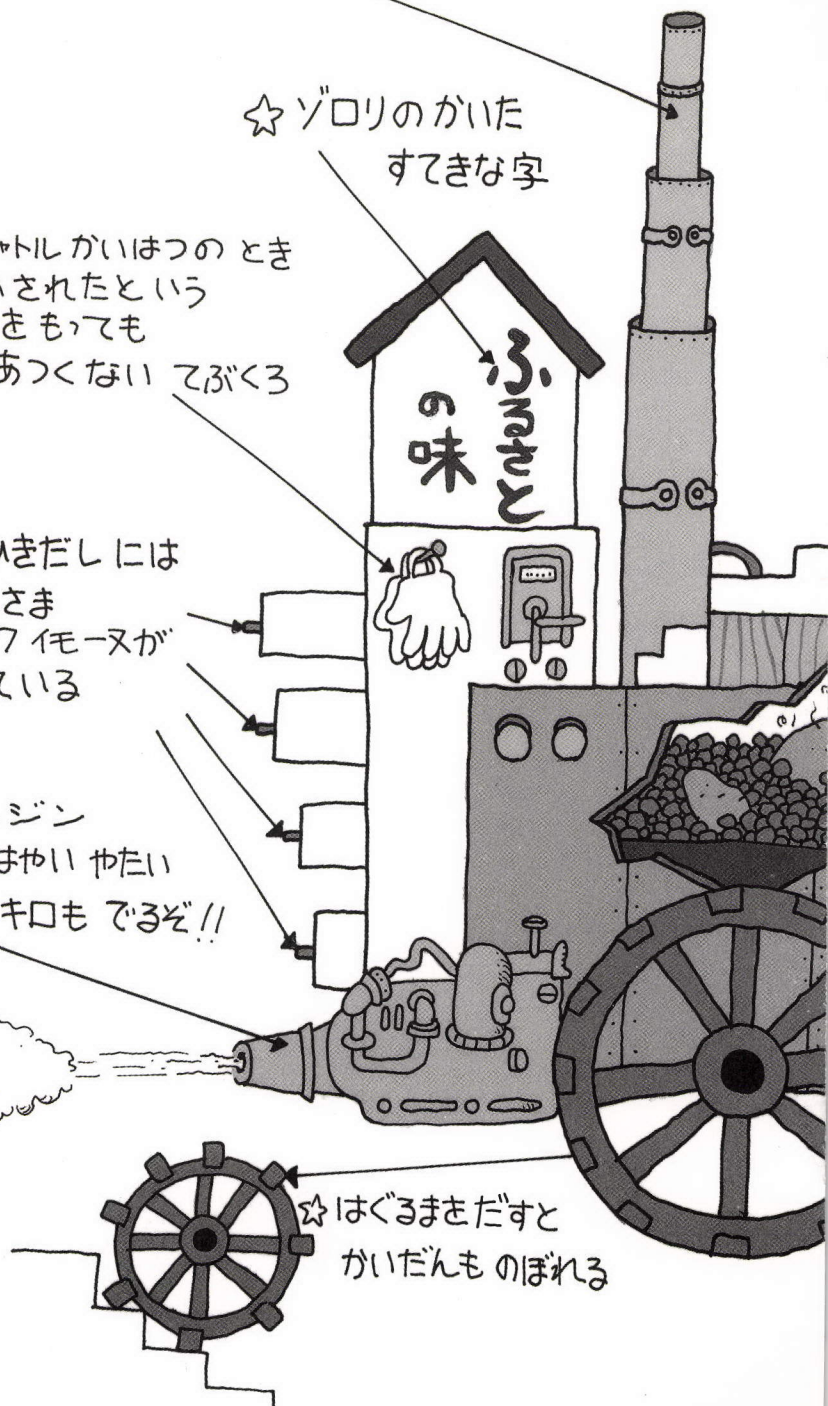
「でも　いけないわ。
子どもたちに、よりみちや
かいぐいを　ちゅういしている
わたしが、やきいもを
かうだなんて……」。
さゆり先生は、ひきかえそうと
しました。
　でも　いしやきいもの
においは、ますます

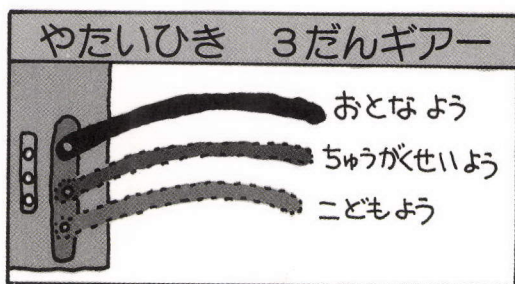
さゆり先生は、おもわず　はなを
ひくひく　させて、うっとりと
その　においを　すいこみました。
「ああ　この　においは、さつまいもの
王さまと　いわれている、
ホクホク　イモーヌの　においだわ。」
さゆり先生は、せいとには　ひみつにして
いましたが、いしやきいもが、
だい　だい　だーいすきだったのです。

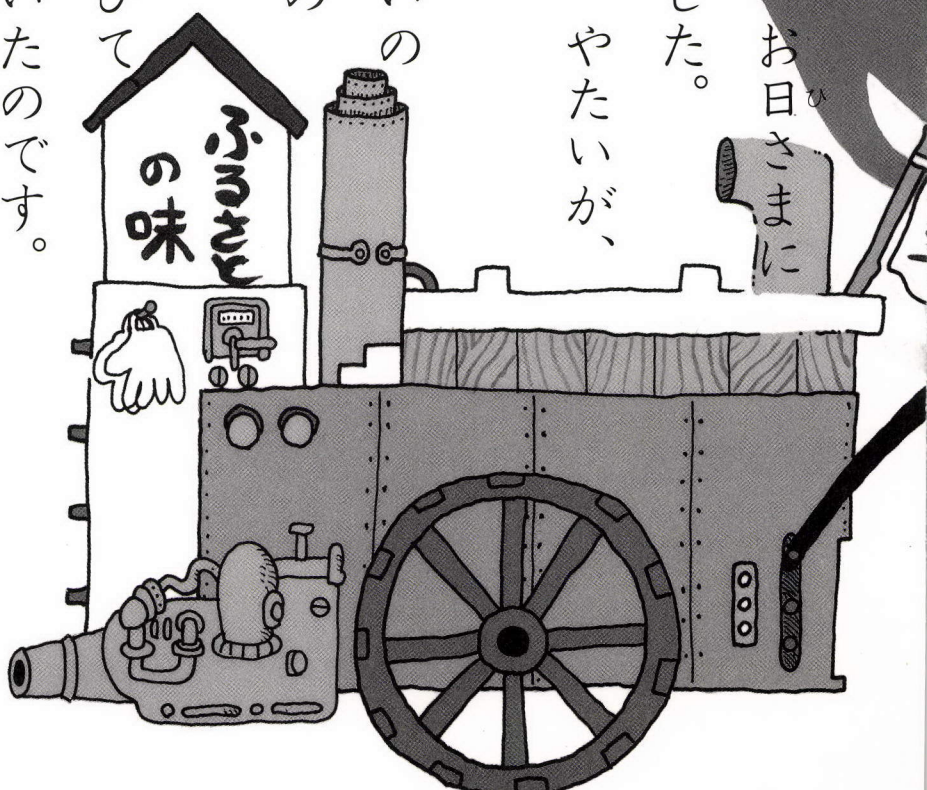
プ〜ン
なんて　おいしそうな
においでしょう。

さゆり先生(せんせい)は、せいとたちが
ぶじに　とおりを　よこぎったのを　みとどけると、
きょうしつへ　ひきかえそうと　しました。
と、そのとき……

「あっ、だめよ。はしったりしちゃあ。きをつけて
おかえりなさい。おほほ、元気いいわねえ。」
ポイポイたちを　うけもつ　さゆり先生は、せいとを
みおくりながら、花のように　ほほえみました。
さゆり先生は、やさしくて　きれいで、スタイルの
よい　ぶたの　先生です。
ももいろの　カーディガンに、うすみどりいろの
フレヤースカートを　はいた　先生は、まるで
バラの　花の　つぼみのようでした。

さて、こちらは　どうぶつの　小学校です。
キンコーン　カンコーン
おわりの　かねが　なりました。
「先生、さよならあ。また　あした。」
ポイポイも、ことしの　春から
小学一年生に　なりました。
ポイポイたち　一年生が、
校門を　はしって　でてきます。

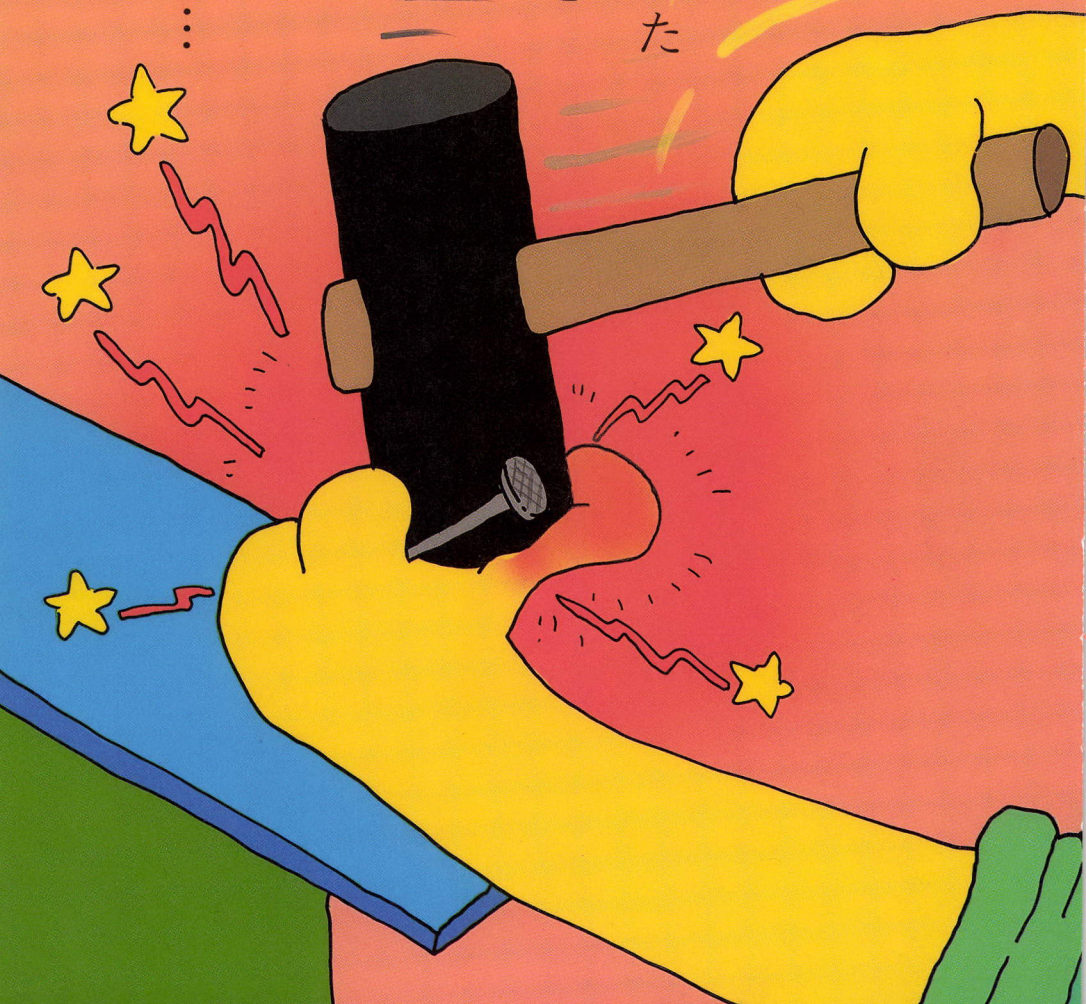
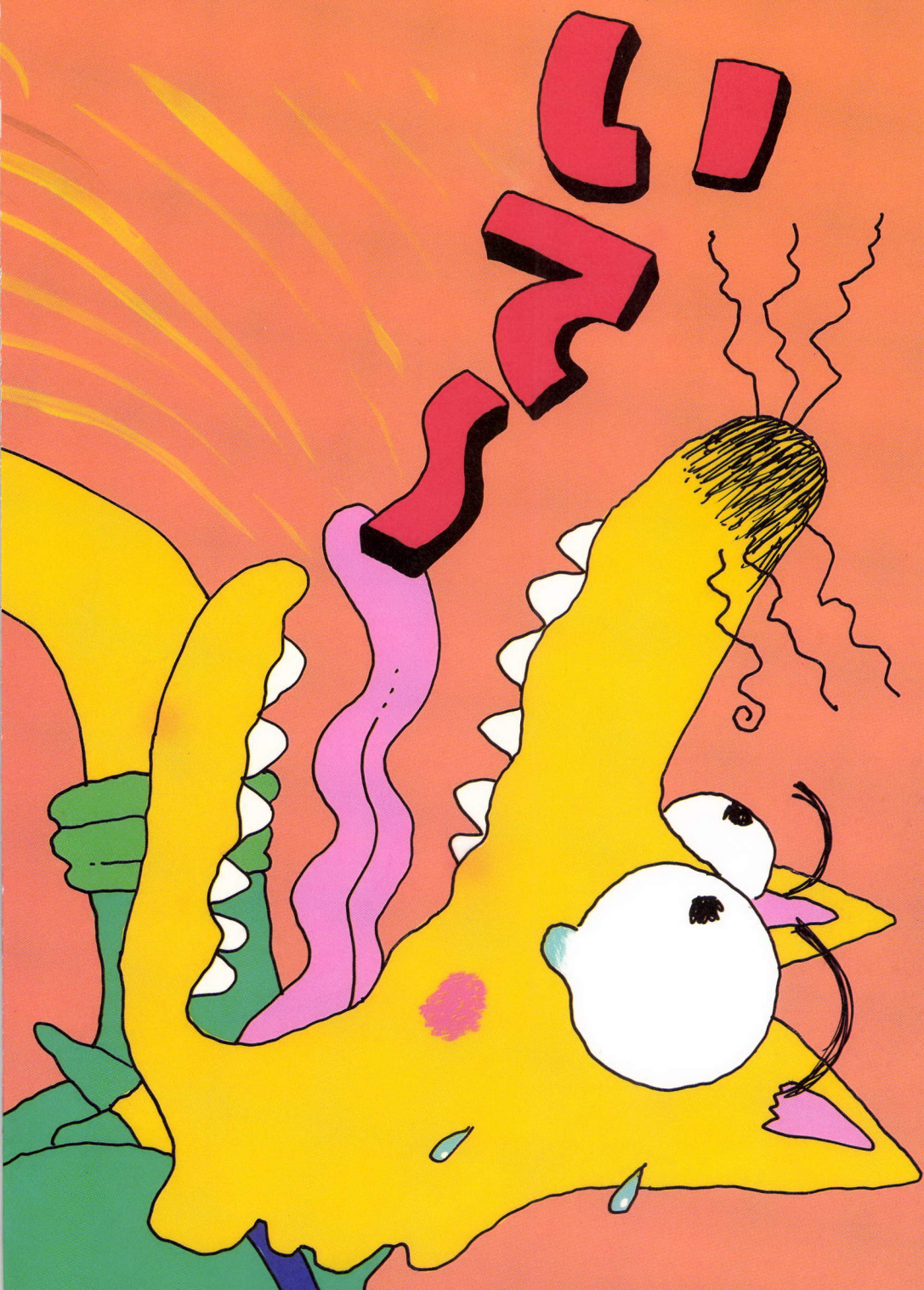
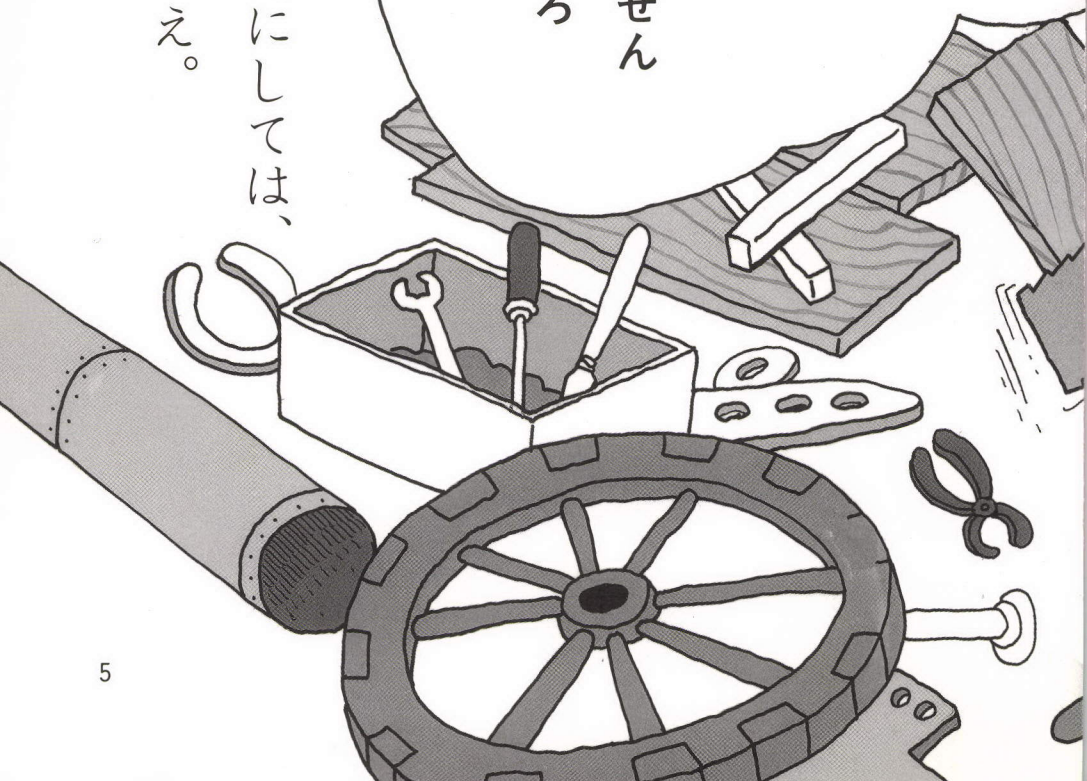
☆3だん にのびる えんとつ
けむりが けむい ときには 高い えんとつに できる
☆ゾロリのかいた
すてきな字
☆スペース・シャトル かいはつの とき
はつめいされたという
いもを もっても
あつくない てぶくろ
ふるさと
の
味
☆4つの ひきだしには
いもの王さま
ホクホク イモーヌが
はいっている
☆ターボ・エンジン
にげあしの はやい やたい
じそく 100キロも でるぞ!!
☆はぐるまを だすと
かいだんも のぼれる

これが　ゾロリ(ぞろり)の
やきいもやたいだ!!

イモジンガー(いもじんがー)の　ひみつだ

☆この やたいは 高さの ちょうせつで
おとなから 子どもまで
ひっぱれる せっけいに なっている

おちていく　まっかな　お日さまに
むかって、さけびました。
「いしやきいもの　やたいが、
できたぞお――」。
そこには、一だいの
いしやきいもの
やたいが
ゆう日を　あびて
かがやいていたのです。

ゾロリの　目が、　きらりと　ひかりました。
いつも　ほうれんそうマンに　やっつけられて、
くやしい　おもいを　している　ゾロリですが、
こんどは　じしんたっぷりです。
ゾロリは、おひるごはんを　たべるのも　わすれて、
ギコギコ　トンテン、がんばりました。
そして　お日さまが　西の空へ　かたむきはじめた
ころ、
「できたぞお――」。

やられっぱなし。でも　こんどこそ、ウフフ。」

「いちちちちち。でも　まけないもんね。やるもんね。
ほうれんそうマン、たおす　日まで。」
と　いうと、はれあがった　ゆびを　チュクチュク
すって、へこたれずに　また、トントン
やりはじめました。
「ママが　いきていたら、『まあ、ゾロリちゃん、
いたかったでしょ。』って、バンドエイドを　はって
くれるのにな。くーっ、ゾロリ、さみしい……。
いまの　おれさまときたら、ほうれんそうマンに

ちょうしよく
かなづちで
くぎを　うっていた
ゾロリは、ゆびを
おもいきり
たたいて
しまいました。
が、それでも……

おや　まあ、春の　うたにしては、
ずいぶん　ぶっそうですねえ。

ゾロリは、日ようだいくセットを　もちだして、
ごきげんで　しごとを　はじめました。

かいけつ　ゾロリの　はなさきを
くすぐっては
にげていきます。

くものすに　やどった
あさつゆが、そよかぜと
ブランコ(ぶらんこ)　するたびに、
きらら　きららと　かがやいています。

とおくで、みつばちの　うなる　おと。
さきはじめたばかりの
春(はる)の　花(はな)の　かおりが、

ほうれんそうマン よいこの1年生

みづしま志穂 さく ★ 原 ゆたか ぇ

ほうれんそうマン よいこの1年生

みづしま志穂 さく ★ 原 ゆたか え